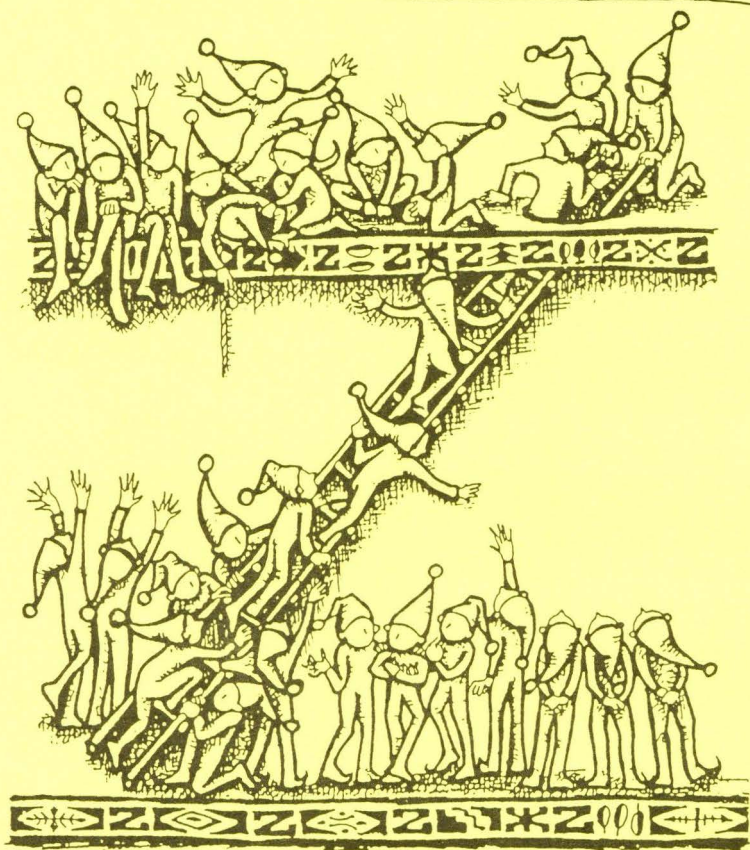


第 15 回

川柳 Z 賞入選作品集



Z 賞選考委員会



川柳 Z賞入選作品集 目次

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
岩崎眞里子	大谷晋一郎	海堀酔月	情野千里	白藤海	普川素床	柴崎昭雄	島道代	西秋忠兵衛	広瀬ちえみ	なかはられいこ	板東弘子	木本朱夏	清水かおり	梅崎流青	樋口由紀子
黒石市………	高松市………	堺市………	姫路市………	西宮市………	市川市………	青森県………	青森市………	八千代市………	仙台市………	名古屋市………	香川県………	和歌山市………	土佐市………	柳川市………	姫路市………
9	9	8	8	7	7	6	6	5	5	4	4	3	3	2	1

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
みとせりつ子	柿木英一	本多洋子	鷺谷美津子	菊地俊太郎	長井すみ子	松田悦子	島田小吉	高橋蘭	渡辺和尾	樋口仁	桑原道夫	宮本めぐみ	東川和子	坂東乃理子	鎌田京子
高松市………	大東市………	松原市………	秋田市………	東京都………	福岡県………	札幌市………	東京都………	札幌市………	愛知県………	四日市市………	堺市………	仙台市………	伊勢市………	加古川市………	仙台市………
17	17	16	16	15	15	14	14	13	13	12	12	11	11	10	10



第十五回大賞

姫路市 樋口 由紀子

妖怪がするりと逃げて春の雪
 おたまじゃくしを死なせてしまふ深い息
 式服を山のかなたに干している
 放水が始まっていた飯茶碗
 裏木戸を開けて見ている沼の輝き
 順番に親とはぐれていく絵本
 おとうとが知っていたのは肉屋の倉庫
 閉じ込めた狂で膨れるビニールホース
 脱水機が故障したのは月夜のせい
 右腕を伸ばしていくと保線夫の家
 踏切は取り除いておく大衆演劇
 面の紐結めば橋が見えてくる
 もうちょつと横から投げる秋の毯
 急接近してくる明石天文科学館
 一つの部屋に二つの明かりウーロン茶

係累や指鉄砲をバンと打つ
 南から桃売りが来る午後の椅子
 神様の人差し指を引っ張って
 豆と男を一緒に煮ると夜になる
 明るいうちに隠しておいた鹿の肉
 父が逝く籠いっぱいに春野菜
 布団から父の頭が出てこない
 大きな旗が振られて父が死んでいる
 父を送るパッチワークの服を着て
 父の死後爪切することも不思議なり
 細長い部屋だったのだ父の傷
 群衆の中から父が微笑んだ
 月の見えない所に父の建て売り住宅
 象を連れた父に会えるかもしれぬ
 てのひらに桃を洗めて父を断つ

48	北方草春	青森県	25
47	あべ和香	花巻市	25
46	西海枝みちこ	福島市	24
45	渋谷美和子	新潟市	24
44	芳賀弥市	仙台市	23
43	富谷英雄	大船渡市	23
42	佐藤幸子	札幌市	22
41	斎藤茂生	青森市	22
40	戎修	青森県	21
39	松永千秋	福岡県	21
38	吉田三千子	名古屋市	20
37	伊藤紀子	苫小牧市	20
36	神谷三八朗	名古屋市	19
35	峯裕見子	大津市	19
34	高田政旗	札幌市	18
33	野々圭子	和歌山市	18

49	岡本恵	水海道市	26
50	福井陽雪	青森市	26
51	斎藤はる香	小樽市	27
52	福井文明	青森県	27
53	横澤あや子	八戸市	28
54	徳永政二	守山市	28
55	佐々木栄一	高松市	29
56	谷沢けい子	新潟市	29
57	佐藤美文	大宮市	30
58	野村禎子	北海道	30
59	諏訪夕香	青森県	31
60	神平狂虎	和歌山市	31
61	岩佐栄三	西宮市	32
62	山本忠次郎	東京都	32
したたかなユーモア	尾藤三柳		33

いまを書く	細川不凍	34
二十一世紀への示唆	橋高薫風	35
選后感	吉田健治	36
選後評	酒谷愛郷	37
閉塞の世を切り拓く内なる精神へ		
情景との係わり	岡田俊介	39
明日のために	寺尾俊平	40
ある選后感	片柳哲郎	41
選后感	八坂俊生	42
細長い部屋	樋口由紀子	43
川柳の風土性	梅崎流青	43
選考結果		44
Z賞オリジナル・テレカ		46
Z大賞・風災賞受賞者一覧		47
表紙絵	岩崎眞里子	



第五回風炎賞

柳川市 梅崎流青

魚を裂く職の人らに沖から雪
欲情なら今も土中に蛇眠る
午後からは雪か手紙の濡れて着く
副葬の本を探しているのだが
飢え少し遠い夜景へ放つ草矢
蔓バラを虚空に這わせ病む中年
憎むほど赤くはなれぬからす瓜
子はすてにわが子にあらす柿熟れる
放牧の牛の愚直よ父もまた
水の音母に余命のことしかなく
答深き春鉛筆の折れ易し
われ知らぬ妻が花屋の前に立つ
花の種蒔いて何から逃れんと
豆ごはん故郷を持たぬ人と食う
火葬場の庭折々の花溢れ

新しき細胞生まる花壇の奥
この空の上に空あり牛蒡掘る
晩秋家族人語を話す鶏を飼う
台風の一夫多妻の国に生れ
八月の少女のシャツを汚したし
戦火果てなしさくらの上にさくら散る
人の死へ若葉てらてら光り合う
冷凍の精子が森の奥にある
少年よ急げ切株まだ熱い
煮凝りの底に沈んでいる昭和
鶴を折るこの生臭きゆびを見よ
首輪なき犬走らせる迷路の街
貨車過ぎる指をいっぽんずつ撥ねて
黙禱の頭上カミナリ雲生まれ
なめらかに喉落つ水菜戦いまま

土佐市 清水 かおり

体内の葦は父より継ぎし青
忘恩や雨のさなかに聞く花
十字架も漂う影も相抱く
半身は土偶の口の暗がりへ
紺青へ広場へ曳かれゆく踵
人去りし夜色の薔薇が勝ち誇る
喪の人が前を行く白い音階
夜の鳥の翼の重みと向きあいぬ
月を抱く少年まぼろしの湖に入る
過ぎゆかず凍夜の果ての馬一頭

水音は深夜聞こえる汝が身体より
傷口のかがやきを見る人ふたり
鮮明な菌 夜のポストより届く
義姉が先行く街中の青い橋
水主の出棺 魚族の男来る
陽光下 君の知らない果物ナイフ
石の花訪ね異教の恋人よ
くちづけは反魂のしじまに交わし
我いつか裸木となりぬ君の遠景
神の書は葉のようにわが裸体

和歌山市 木本 朱夏

別れたくないと叫んでから墮輪
蛇になる予感に鏡伏せておく
問いつめて夜の硝子を曇らせる
眠るしかない翼を失なうてからは
瘤のある枝もわたしも病んでいる
胎内に憎しみの木と愛の木と
耳鳴りが冬の鏡のうしろから
海の青ひとつぶ耳にぶら下げる
ためいきにくもる聖夜の金モール
やわらかい紐を境界線にする

身のほどを弁えている靴の位置
私を泣かせた人が咲いている
約束を守り通してきて化石
聖書売り鬼の館の扉を叩く
摺り足で誰か近づく花の闇
まぼろしの刻を分けあう死者生者
わが死後の黄菊白菊声もつべし
椿の朱奪いつづける人でなし
口紅をすこし濃くして背教者
離壇の闇をめくれば魑魅魍魎

陣痛が始まる春の海峡から
へその緒を大事にもっている港
胸の釘ふたつはずして人恋し
伝えてはならぬ言葉の水に書く
てのひらにその日暮らしの鶴の羽
眉描いて守るべきもの何もなし
大根がすこし萎びて安息日
恥多き日を下駄箱にしまい込む
猫を抱き離婚記念日雨になる
思いきり泣けばいいのに唐辛子

香川県 板東弘子

哀が満つ剥けた表札傾けて
弥陀の掌から昨日がこぼれ私をこぼす
掌のあやうい闇を愛おしむ
秋霖止まず泥田を抜けてゆく父が
父を思うて父から逃げるラムネ瓶
翼ひろげる音して少女それっきり
蠅涙のひとすじ渡りゆく鶴か
いっぽんの縄がほどけて少女病む
錠剤を転ばす ゆるり火を焚いて
旅はひとりの私を流す駅は枯野

握り拳をほどこきに冬の林まで
ほうほうと風 仏らは燈に集う
仏半眼落ちる椿の朱を見ず
花亡 ははを思えば母になる
小雨ゆく傘のほてりも寺通り
ちちははを追い抜く坂を振り返り
寺町をいちにち飢えて濃紫陽花
斑鳩をそぞろ歩けば月の船
鉄斎の山の清水を手で掬う
水面に映す亡父母は笑ったか

名古屋 なかはら れいこ

三月の水の昏さが手首まで
春愁や右半身は影のまま
空箱を振るとかすかに人の声
解けそうな暗号がある雪が降る
髪軽く揺すれば落ちる人や鳥
すこやかに咀嚼されたし野の重
膝曲げる 膝伸ばす まだ夢は見る
桜北上 春は阿呆になりきって
視神経を軽く病んでる故郷の桜
わたくしの息で開いた桜です

ひらがなを覚え始めた頃の赤
痛む箇所 線でないでゆくと鳥
鳳仙花ばん 夢のあなたもばばばん
透明な塚にもやはり薄き影
水揺らぐ私の足音が落ちて
げんじつはキウイの種に負けている
老いてゆく矢車草の青色と
しあわせふしあわせ 縞馬の縞
桃が咲く横隔膜を押し上げて
海光る 切瑳琢磨ということば

一本の樹として君の前に立てり
二の腕の内側 まぼろしが育つ
口開けば鳥が飛び出すから黙る
瞳の奥のそのまた奥の針葉樹林
幸わさが降るよ螺旋を描きながら
邂逅は《都すこんぶ》鼻の奥
咽頭に青葉が繁り青葉のことば
人型に闇に残っているばかり
みぞおちに滞まるシベリア寒気団
鳥になる鳥 人になる鳥 夕茜

仙台市 広瀬 ちえみ

階段を落ちる 神さま痛いじゃないの
壁の絵のりんごが一個ずつ消える
透きとおって見える手足になる部分
赤ちゃんを寝せるヒヒの木の下に
転ぶのを見下ろしているハハハの木
入り口を忘れた家が出来あがる
棘のある魚で水槽混み合えり
花束をあけてしまった後の両手
泣いちゃってシチューのお味わからない
ガラス屋をじっとひと晩待っていた

「ただいまあ！」水は汚れて戻るなり
門しめる家が逃げ出さないように
カタログのベッドにいつの間にか眠る
音楽かける冷たくなったお料理に
歯の抜けたなまあたたい穴と過こす
空腹の中に噴水あがりおり
ぱったりと出会う失くした半分と
お手洗い借りるこの世の真ん中で
ベイズリー模様の中に迷い込む
暗闇を甘くなるまで囁んでおり

気になっているのからだのいはいぼも
水面のゆがんだ顔を手に掬う
お隣りも血を出しながら咲いている
がらくたの山から足を探し出す
キャベツの葉少しもらえば生きられる
縞馬の縞をくっきり塗り直す
ポコポコと浄水場へ集まりぬ
額縁を抜けて出かける星祭り
さくらひとひら布団の中についてくる
ほのぼのと春の剥き身になっており

八千代市 西秋 忠兵衛

あらっ と出土する埴輪の妻
土器のかけらが一つたりない 津軽の晴れ
一月十七日の時計うごいてる
春闘や白色レグホン一列に
ムルロアが亡くした椰子の実の番地
八月忌はくは踊んでひくく水呑む
西瓜の縞かぞえ八月十五日
偶数に豆腐を切って護憲論
コンビニで売れる憲法の瓶詰
砂時計 川田龍平くん生きる

沖繩の話 三越の話
オリンピックの好きな即席カレー
駅伝の汗の濃淡 リングの季節
原発の村の普通のおばあさん
一億一個目のきれいな帽子
胎内で一回転を学びけり
少年の嘘ひまわりを組立中
ひとつねの葱あり青い空もある
自転車うしろを春の手がつかむ
全長を見せて寝ている夏の風邪

おとうとも六十すぎて空を見てるか
二回ほどカミさんにお辞儀する
眼鏡屋に立ち寄るマラソンの途中
地下街のコーヒー店で年をとる
行きつけのめし屋で生きた振りを
がんばってください と言う唇
古机ひとつ北緯というところ
コンビニの明かりがとどく地球かな
すわりなおして抜本的に六十八
神様 そんなところできこえますか

青森市 島 道代

揺れるだけ揺れてどこまで芒雨
うずくまる水仙の芽の陽や月や
白杖の行くさきさき海鳴りは
折り鶴の渡りへ熱い掌を伸ばす
描かれた日輪までの長い階段
沖へ漕ぐもつれる髪はそのまに
喉笛や石と転んでゆく地平
渡される言葉が重い遠山彦
花守りの時計狂わすわが暮色
転がした林檎と乾く春の皿

傘さして桜さくらの片隅に
風に向かつてすこし呆けた花の眉
カオカオと鳥の真似して暮れゆくか
たんぽぽがたんぽぽでいる日の痛み
いくさとは一人のもののか桜闇
土砂降りを駆けぬけ家族ちりぢりに
流水を囁むストックの香の海で
骨肉の絡まる指の凍裂よ
花茗荷砂囁む姉も妹も
折り鶴の母子に病母の雪つもる

病母の座は揺れやすきかな舐綱
春絵巻笛に目覚めし人ら来て
ひとつずついのちを消して野の花火
縄文の木霊がかえる金魚鉢
後へ後へと祭りの笛よ流れ難
萩こぼれるまでを刻んでいる空よ
白蝶のひとりて舞えばひとりの死
春ゆくや辻ごとに積む陽の檻樓
どの役も未完のままの花の舞
この先を夢見るように花筏

青森県 柴崎 昭雄

春雪剝那ゆるぎなき灯を一樹に点し
石ころり人のかたちのはじまりは
春光の掌からこぼる群れなすけもの
菜の花やどれも烈しき呼吸して
桜桃忌両手に荒野あるごとく
ひたすらに蟹食う 遠い少年賛歌
沖は曇天かもめをまねているのだが
あくまでも梯子をのぼる解体屋
朝顔の空高くして母のそら
目覚めるも積み木遊びも数えうた

まっすぐに鳥墜ちてくる洗面器
剥出しの夜は少年の蛭狩り
またしても空想癖の馬なりし
銀河かな髭剃るときの鏡にも
直立不動 頭上から打楽器おんがく
光年の宙渡るべし少年祭
梳る母よ剥出しのひまわりよ
あだし野の道しるべこそ夕やけ小やけ
月は浮くべし青き梯子は伸びるべし
薄紙の夜に薄紙の人体図

父の部屋の青き星座はほろ苦し
ほたる草地上の孤影かるがると
月光に系図さらして茶漬飯
母の手のたくましくありほおずきよ
すすき倒せば笑い袋が天から地から
冬の葦刈りつくす手のはるかななる
何はともあれ夜は少年鼓笛隊
冬木立るいるいと積む糸きり藪
ことごとく青き骨肉雪あかり
延々と太鼓打つべし埴輪行

市川市 普川 素床

寝不足の視力で夕暮れをまたぐ
亡びはじめの自画像の白い部分
黙っている壁のいろいろ鼻のいろいろ
笛に敏感な雑踏の温度
らくだの歩幅でわたしを半周する
自由席指を何回数えたか
真中がぼっかり抜けた昼の裸婦
痴呆症のみどりの苦が美しい
本当を言うまで影をくすぐりつつける
石の上のてのひらてのひらの上の石

バッハが好きで風船ガムを噛んでいる
しみじみと偽者たちのあたたかさ
ことされるまでひまわりの種をかむ
遠い岸三文判を捺しながら
転生の午後のへちまがゆれている
余熱から余熱へ淡いほんのくぼ
火宅とは 鏡のくしゃみしきりなり
あとがきの死体をオキシフルで拭う
窓枠のきしみにそっとキスをする
空を凹ませている透明ならくた

西宮市 白藤 海

西宮市 白藤 海

逢うために生まれたわたくしといちよう
生きていけそう雲が頭上に広がって
わたくしを諫めるように水冷たし
哀しみはサイダーの泡 次から次
桜餅じたばたしないことにする
わたくしに影ある春の日曜日
乾杯す未来が続くかのように
かばすすだちわたくしもまた青きもの
片耳に微量の毒のごとピアス
わたくしをほおっておいてくれる雲

眺めているだけでも倅せな枇杷
朝顔の今年はじめて咲く色は
師匠などもたなくなつてとんぼ飛ぶ
ひっそりと快楽の書をひらく夏
わたくしの行く先に猫じゃらし
父だけの骨が入った墓拝む
格別に逢いたき人もなき晩夏
母時折のこり時間を口にする
生きていてくださるだけでいい薊
後戻りできない夕顔の白さ

猫じゃらしみたいいな声でする返事
雲はいいなあ秋はいいなあそれだけで
わたくしと空とが区別つかぬ秋
秋の天わが人脈の貧しかり
風呂の蓋 子は確実に出奔す
諦めは微笑みになる秋桜
わたくしの錘のようにいちようあり
今まきにはじけんとする種はわたし
晴れているだけでうれしい誕生日
いっぽんの樹を思い出し眠るなり

芹を売る誰の妻でもいいじゃない
流しにはほうれん草がある亜細亜
妻四人すいか島に横たわる
アイロンは抜いたかと聞く人攫い
浅漬を試食している性的な記憶
股のぞきすればシヤム湾まで割れる
五月寒「せいっ」と発語をする妊婦
有無有無と子を産むシルクロードのはずれ
ペンタックス夫ある身を二重写し
愛妾の暗証番号はらり散る

のぞき窓チラリと肉だけのアジア
東天が曇りはじめる味噌を溶く
壬生菜ザクザクわたしの眉の向こう傷
水の惑星グラリとはったい粉にむせる
二つとも耳盗まれて野にわらび
愛人のひとりは秋に産むさくら
めし茶碗重ねて月を曇らせる
婚姻というものの殺生石の熱
おとうとに口紅を買うひなげし橋
水くぐることの快楽よチマチョゴリ

姫路市情野千里

齒が欠けて男は松の木から降りる
固型スラブになった夫の置きどころ
トムヤム・クン死は肉体をふりほどく
哀願や喉に星屑刺さるまで
ハレム混雑して夏期講習を開く
印度カレーはメタルと答え一夜妻
鞆は酔うから料理長を吊る
仮婚や明智小五郎またぎ越す
また生きて自由恋愛する鎖骨
薔薇の季を片肌脱いでやり過す

堺市海堀酔月

ぶらんこを押しにきたのは解体屋
人間を踏んで三階まであがる
斧の真下にあなたの時間わたしの時間
エレベーターのボタンの中の抽象画
階段の数だけ自意識を千切る
金魚鉢で死んでるしあわせな金魚
ほんの少し話の端を曲げておく
一ばん細い指に止った私生活
鯛焼きの尻尾と国交正常化
ちよっと貸した耳が汚れて戻ってくる

正直に言いなと風を裏返す
単三の戦車に乗っているロゴス
美しい禍 蝶は二度死んだ
アナキズムは健在白いふくらはぎ
裸婦像の亀裂とほくの關係
夕陽に跨ってる傷だらけのエロス
毛穴からことばを出す女に負ける
道ならぬ道を知ってる土踏まず
犯人は親指より太い小指
整形後の写真を神様に送る

影法師が笑う八行にない声で
ぼくは教祖蛙の街で臍を売る
一人称膨れる 冬バラの沸点
原色を使い果して墜落す
影絵が揺れている 染だらけの空間
角のない牛を飼ってる闘牛士
浮き上った静脈の整数乱数
送り主不明の消しゴムが届く
道いっぱい造花を撒いて退却戦
捨身飼虎ゆっくり梯子から降りる

高松市大谷晋一郎

カマキリの首がごろんと野は火祭
鉄置く右手は秋の海摺む
すだちをしぼる俺の臭いに秋の渦
波止場の音は懐かしきかな父を知らず
野の俺を連れて酒など峠まで
秋桜に狂乱の血が列なしして
松明は春告げ鬼の右手より
藁藁きつめて千枚畑を火の海に
春告げ鳥に猫は戻らぬ数の中
悪童の山降りてより梅が咲き

体内に野火はしらせて轟けり
武者絵巻から醒め菜の花の静か
桜剪る馬鹿のひとりとなり登る
嘘つきの少年の樹に桃の花
父帰らざり母ほど知らぬ露の薹
野に伏した数ほど草の名を覚ゆ
「山笑う」とは遠きのことよ芋ふかす
川溢れ でて虫の皆木にのぼる
「家にお帰り」婆の手先の敷動く
いまに爺の夾竹桃を売りゆく天

呼吸さえも崩れ易きは夕べの花
水幕を越えて鮎らの消ゆ山河
跳ね魚の湖面輝く夕の笛
ひと房の枇杷盗むかな枇杷日和
百畳もあるべし寝釈迦影法師
笹を売る数だけ消えてゆく友ら
水草の茎より青し思惟着し
青餓鬼の十を数えし父への記憶
初秋の海に首まで沈む曼珠沙華
芒を折ると秋の大地の人臭し

黒石市岩崎眞里子

母の壺

壺を描く 中にワタシの居る如く
人待つ静けさ連も実を成せり
過ちをせんとや我も生まれけん
満天の星を抱えて母から聞へ
コスモスははらり骨片ゆらり天の底
抱きしめるほかなし熱き痛みたち
ただ歩くだけでいい ふたりなら
大根を切っても切っても雪花火
かもめかもめ齒科寝台の波高し
影神楽 大地の上の死の上の

泣くな子よ冬を迎れば氷華無限
病み習うヒト科の桃の輪の中で
人間も冬も忘れたかたつむり
風に遇うために生まれしやぼん玉
少年の脱皮成るなり伎楽面
クレバスは血を帯び藍を旅発てり
解体の家屋も父も仁王立ち
てのひらにまだあるを見ん花筏
女人禁制 されば宇宙もことまり
曲りたんば 袂短き母なれど

むらさきの西日が待てと叫んでる
沈む陽をいくつ納めて木は人に
人と遇う海の深さをふるわせて
許す時ヒト科の蛍となりたもう
約束はガラスの芯に咲いたまま
海碧し 紫陽花村の露の子ら
捨て菜こぼし菜雪と契りて春を待つ
待つて待つて母から母があふれ出す
では、春を！マジシャンくるり裏がえる
その先は母が育てし蝶の視野

待ち合ひの絵本は読んでしまいいけり
ひび割れた卵を毎日持ち帰る
馬車になるまでじっと見つめている南瓜
実が落ちる背中の鍵を外されて
温もりがまだ少しある放置自転車
やさしくされたところポツカリ穴になる
わたくしの弱いところに着く手紙
黒い背中の背中にヒョイと裏返す
変わらないでいようと思う柿の種
みかん剥く間に逃げてしまう幸せ

点線を繋ぐとのつべらぼうになる
いつからの邪心レモンは厚切りに
淋しさに向かって歩いているのかも
大声で返事する私がいた時間
一輪差しが混んでいるので帰ります
いつも発熱 旅人が来た夜は
忘れたことが山ほど鍋の蓋
スポットライトを浴びる通行人役で
自転車にときどき入る青い空気
コスモスが頷いたので産むことに

仙台市 鎌田京子
補助線をいっぱい引いて立っている
手焼きせんべい寒い扉が開きました
人恋し飛行機雲の果てるまで
チケットの半券持ったまま枯れる
物置に太くて長い紐がある
海まで逃げる子どもが降ってきたときは
ぐっすり眠るナイフを研いでから
人形になれないノラの除光液
楽器屋の前でときどき立ち止まる
離れたら何か掴めるのに 両手

加古川市 坂東 乃理子

缶詰の中から猫の音がする
痛だけの一生だったあこや貝
沼は黄色 それでも生きて魚たち
焼きたてのパンの匂いを放つ犬
パジャマ着た人が布団を捨てている
楽器にも徴生え不気嫌な私
桑の実はまだほろし 桑の木は切られ
すずなりの毛虫の下で目をとじる
あの人の倍ほど生きて炎天下
この夏はこのままでいくやぶれ靴

トラックに乗って自動車うれしそう
追憶の中の四角い青い空
手の中のみどりの蛙 毒蛙
私も飲んだ森永ヒ素ミルク
チューバ吹く母を亡くしたばかりの子
蛇も私も池が好き川が好き
定位置で糞虫死んでいるのかも
狐もまじる私の叔母の群れ
エビフライみたいに見える人魚の絵
鈍い音だれかのすべり落ちる音

大まかく寝ておりいつの間にか秋
昆虫の思考回路を考える
爆死したさくら拾って帰ろうか
三味線の音が聞こえる日曜日
ぬくぬくと堆肥の中の雀たち
こたつの中これは一体誰の何
卵の形転ばぬようになっている
次々と死刑執行されて 春
大二匹つながれている風の樹に
手をあわせ枕がわりにして眠る

伊勢市 東川和子

頬杖の向こう九月のひまわりよ
話相手になりましょう風の部屋で
七月六日その朝はみんな笑っていた
突然は突然らしくやってきた
腹部大動脈瘤破裂 義父の死亡診断書
どの人もドラマの中で動き出し
おはようございます 喪の朝に溶け込んで
雨しきり喪の家という視野で
喪主の妻という顔で過ぎた三日間
とりあえず手続きだけは済ませよう

考えるのはあとにしてちらし寿司
洗濯機が動きたしたよ 生きている
白い色だねえ 初七日の夕顔は
トルコ桔梗がきれいと言って義母が泣く
ありきたりの言葉で明日も明後日も
忘れられずに捲られていた義父の日捲り
義父の分まで作ってしまうハヤシライス
確かめて五枚の皿を並べている
そのままだ位置にある義父の椅子
あわてて麦茶を買いにゆく 盛夏

空が広がっていた買った物の帰り道
人が近く 空に白線ひとすじに
生涯という二万七千八百三十二日
まだまだ馴染めない義父の戒名
夫婦で飲んでいる 胃薬の三錠
写真の義父が笑っている夏の終わりで
家族六人 平凡な幸せでした
図書館の本は返しましたよ お義父さん
ばかりとしたまま七七日忌以後も
風は風のまま 私は私のまま きょうも

仙台市 宮本めぐみ

冬花火十発までは数えたが
後退りするたび見えてくる砂漠
完熟のトマトにすこし近づけり
枯野残照ゆつくり登る秋の階段
五月の森でロック音楽聴いている
リタイアの髪なびかせて春の街
たましいの深いところに吊る本音
血縁のアンテナの中にいてひとり
花冷えや脈絡のない話など
健忘症の象をいびき飼っている

あいまいに結論延ばしする夕日
自己主張いちどくらいは朱く咲く
解放区で傘の雫がまだ切れぬ
ノンフィクションの長いながい霧笛
弄ぶ風ありストンと転げたり
定型の囲みの中で発情す
雨が止んだら礼拝堂へ行くつもり
価値感と同じでピアノ連弾す
同列になれば優しい冬の雨
再会へ鏡の曇りなど拭いて

祭り終わって浮上した首消えた首
時効になった帽子を流す秋の川
隣町まで飛んで行った紙ヒコーキ
通り雨やんわり試し斬りに遭う
二・三段降りると見える冬景色
川底でだんだん不整脈になる
賑やかに引っくり返る欠け茶碗
生きたいかと問うているのは冬の天
春炎のぼたんも椿も死を思う
人生の出口に置いてある花輪

立春や宮中に女人あることし
抽斗に空き箱のあるあたたかさ
海鼠食いながら無頼の話する
てのひらにようやく春の到りけり
蔵の中鏡があつて顔映す
裏門の開けっぱなしや桜散る
君の瞳の中の八百八橋かな
自転車に空気を入れている元氣
なつかしいこと思いつつ競馬見る
エスカレーター僕のとりのペンギン君

理髪店出て世の中はまぶしいぞ
割箸でつまんでみたるかたつむり
金魚すくいを覗く わが喉仏
綿菓子の子の一人みめうるわしき
指先に蜜の臭う夏の恋
生傷を舐めて獣はかなしきや
浴室の乾ききつて水鉄砲
無花果の樹に肉体が近づきぬ
旅半ば魚臭き口中を思いけり
失恋の彼奴 昆布のしたたかさ

堺 市 菜原道夫
踊り子の身の内の音聞きにゆく
風船のにおいを嗅ぐと神無月
手の甲を松葉で突つく劣情や
金網に近づいてゆくにやにやと
縄電車風に突き当たり前のめる
わが耳朶の薄くて牡蠣鍋旨し旨し
感極まって大根掘り散らす
恋人の尿意をなつかしく感じ
窓開けて風の音の中に入れる
鷹に飼われつつ男恍惚たり

四日市市 樋口 仁

粉雪が振り込む胸の焼却炉
ポケットが破れて海があふれだす
涙腺を伝って人が落ちてくる
手招きしたのは夜の古本屋
キャッシュカードの脈搏をとっている
春は満開妻は鏡を降りてゆく
風花がひとひら父の事件簿に
吊革の穴から首塚が見える
宙吊りの海峡をゆく定期券
自転車洗って不意に備えよう

半ドアのまま花道を駆けている
原稿の続きをしまふ冷蔵庫
虹の帽子を春と秋だけ出してくる
本箱の中から飛んできた傘だ
ひとつも謎がない父のミステリー
春の布石を人差し指が変えにくる
夕焼けにくるんであった生卵
冬の底こが沸点かも知れぬ
受話器からこぼれ続ける擦過傷
悔いている男のテールランプです

振付けを考えている秋の妻
父という髪が濃くなる時間帯
背骨を削るように鉛筆を削る
傷口へ無数の夜を折っている
木枯しと同音域を行く父だ
門燈へまっすぐ帰るなみがしら
表札は円周率を知っている
日めくりの上には父の一輪車
化石になった手紙と道行きが続く
肩籠できのうの亡骸を探す

愛知県 渡辺和尾

足裏を指で^そ準えそれ以後無
慮される今今夜あらはこそ
炎暑酷暑残暑人間の曲がり角
八月へ九月へ雨はなお続く
生きている限りかように暑い夏
軟らかく九月に入りバス発車
窓辺には鳥寄りきたりあたたかし
影になる部分がともなつかしい
風船をふくらませるのも命がけ
鳥影が窓を横切り寒い季に

飛龍か土龍か朝日を前のできことよ
わたくしと私がいる午後三時
眠るほかに小さき宇宙小きなベッド
ぼんやりと秋を感じる月の暈
秋の暗闇とても深くて優しい闇
わたくしがまだいるあきがふかくなる
雨の日の肩から今日をぶら下げて
君と僕 歩けば影も歩くなり
真実を探すお日さまという時間
厳冬のいちまいの葉の朝きこと

青空をこしも仰きおめでとう
すでに青空 雪の残るは幻か
きょうも雪 息あるものは口嚙む
揺れて闇 揺れて二月の名残り雪
柔らかな影で過ぎゆく花のした
春の始めに川は流れて若い歌
クローバー確率勝率雨もよう
優しいものがみな集う桜咲く
夢多きひとが取り巻く千年杉
歩き疲れて有名にはなれなんだ

札幌市 高橋 蘭

次の世の花とまみえる寒晒し
清明の水に魚臭をくぐらせる
黍の髭こゆく伸ばして天声人語
遊泳禁止の札などもあり 阿吽
紫蘇の実も髪もこぼして女人宿
依存体質雪がとどけば雪に添う
一縷の春脂肪の髪より芽吹くもの
繕えぬ裂け目もあつて月夜茸
薙ぎ倒すほとけもありぬ守備範囲
ガラス館の床泣く旅のつれづれに

身の丈を測って下さるは他人
世紀末の葦を刈り込む身の始末
人ら溢れて異形の街をなしくずす
カーテンも花瓶もジブシーにはなれぬ
一塩の魚の浮き名は水葬に
草刈りの草にもどれば始発駅
釣瓶おとしの耳から艶唄がこぼれ
葬儀屋へ連れ立つ晴天のつづき
月光にあしたがあつて欲情す
姥捨ての空はスコーンと歯髄まで

箸置はすこやか宿罪のありか
じゃがいもスターの墓からひろう哲学書
散り際の花と刹那を分かちあう
一服の毒白湯をもて水をもて
飛び級の羅漢の厚い足の裏
禅問答ばかりと落ちる秋の蠅
花伝書を棒読みにする傘の骨
捕食する秋なればこそ透明度
敗走の道の埃を吹いている
痒い背を向けるのっぺらぼうの街

アリバイが回転木馬で昼寝する
父の忌へ越後の酒の香を満たす
わだつみの声が聞こえる遺稿集
決断を前に百言吐き捨てる
叱咤する自分に詫びている自分
晩学の夢捨て切れぬ独語癖
春風へなかなか抜けぬ鼻濁音
春眠の名句唱える床の中
出る杭を買って男の顔になり
流された月日さすらうハーモニカ

去年より落ちた酒量の祝い酒
コーヒーと四コマ漫画する朝
内づらに秘めた男の社交性
シャンとして古希の祝いを辞退する
民謡が自慢の母は島を出す
勝敗を超えて一粒光るもの
道化役演じ納めて仕舞風呂
めまいする脳内革命かも知れぬ
達人は自在に生きて粋の内
魚偏の湯呑みへ高い授業料

東京都 島田小吉

捨て兼ねる湯呑みが一つ若い後家
腰据えて戦争体験語る夏
寅さんのマドンナが哭く蟬時雨
再びは帰らぬ若い日を歌う
履き慣れた下駄は素足を知っている
ひとときをベイトーヴェンに身を任す
ストレスを放つ心の窓開ける
句集伏せ心行くまで酌む地酒
自己暗示かけて一服風邪薬
擦り切れたレコードを聴く闊病記

札幌市 松田悦子

前略後略 彼岸此岸のあみだくじ
とある日の土焼きに還る現在地
あれも泡沫これもまたかた夜想曲
胎内をめくるめくものやがての無
ほどかれて灰になる縄ほどけ抱く
菜の花の黄のめんめんと春の霊
花吹雪音を殺して私をころして
身の丈という月影に仰臥する
一日を病む一日をてのひらに
今生の墓掘り進む誕生日
吃音の関節 夢野を夢にして
綾取りの指なまぐさし北雀
現実を見極める旅転がして
遠雷輪唱 紅差し指は空ろにて
飯の世の月光なれり夢なれり
傷あとの深い時間を背凭れに
わたしのありかコーヒー缶を蹴り上げる
走馬燈この世に果てのあるものを
生きてそろ白い空間游泳す
体臭がさむい水嵩 水の墓

木馬は風で祥月命日銜えている
風花や生死の沙汰を尋ね来よ
年月の川のほとりの照る日曇る日
問わず語りの芒とゆるる古い月
角砂糖 霜月の角削られる
葉脈の命かさかさ秋冬へ
雪虫も写楽の謎も降り止まぬ
一生を問う愚かさで米を研ぐ
風紋の崩れ戻れぬ駅を発つ
地の果ての仏にならむよだれかけ

福岡県 長井すみ子

道づれの丑も還暦春の膳
黙約のあおい洋灯に繋かれる
全力投球すすき見事に枯れている
綾取りの橋の途中のいもうと忌
勝者だけ残る水面の花ひとひら
待つことに慣れて石には石の艶
ネクタイを解けば答は見えたはず
冬の塔わが遍歴の正面に
水洩れの音を極の中できく
木守柿がまん比べは誰とする
石けりも姉も残像遠花火
約束のない指今日が昏れてゆく
謀一つへ夜の爪伸びる
そば吸るとうに野心は捨てた音
銀色の海に還してやるいのち
不揃いの鶴黙々と折っている
雨の夜は雨の民話と添い寝する
冬陽一刻母を包んでくれないか
仏さまのかたちに死んでいる蛙
別れ際の台詞冷凍しておこう

絵になろうなろうと桜散り急ぐ
鳩尾にいまも消えない火の科白
私から何を奪っていく闇か
わが街の寅さんに遇う舟溜り
下積み父のヘルメットが光る
鉛筆の先にうまれて消える虹
水たまり愛は先着順ですか
この先に母を裏切る辻がある
凍河まであおい妬心を追いつめる
闇の向こうの闇の向こうの花野かな

東京都 菊地俊太郎

ロウソクの明るさ嫌う拔糸痕
係累に加えるいちまいの水母
みんな寄り添って分刻みの嘔吐
切り抜きの言葉が臭い出す真昼
曲線をなぞる否応ない明日
街並みに溶け合う定形の極
晦渋の背中に晒すラムネ売り
目次からくっついて来る他者の指
手荷物を増やしただけの逃避行
膝の皿割れて色違いの視界

筋肉の裏切りにあう花畑
焼き物の音がする肋いっぱん
戦後史にかぶさる淡白な背中
移動ベッドの控えめなミュージック
焼跡に声あり水飴の行方
地の底の宴こんがらがる十指
慇懃な羽虫と出会う擬装都市
びん詰めの遺書に付きまとわれている
三脚を抱え煮え切らない裸眼
オートセイ寝そべる雑踏の渴き

描きかけの絵をちらつかす遠来者
仰向けの蟹と分け合う昼の闇
余白ひきすずって机上の胡桃割り
調理場の隅に追いやられたロダン
生乾きのシャツが世紀末を跨ぐ
原寸のナイフと巡り合う暗渠
変貌の菌室あらわに魚の声
据え付けの楽譜にこぼすぬい牛乳
面裏に呼び込むほどの飛沫
書き出しに躓く自分史の発火

母校解体呪縛を一つ解くように
淋しくて誰にも会いたくない真昼
ソフトクリームなめて私も子も無心
駅の匂い抱いて旅より父帰る
雨と日暮れを願うは野球未亡人
待つのは苦手バスに男にエレベーター
子の寝息届かぬ場所が胸にある
淋しくて飛び込む土曜の夜の本屋
時刻表無口な妻の愛読書
森番のように古本屋の店主

あなたの帰り待って私も煮くずれる
天使の羽が生えてきそうな子の背中
砂に咲く花を信じて子育て期
教室の窓にも地平線のかけら
子等のいぬ校舎でひまわりだけが伸び
「いかにも先生」向こうもそんな目で見てる
三十代まだボール球見逃せず
若さに夏に……免罪符なら揃ってる
赤いダリアが咲いたのでなどと出す葉書
こんな女を母さんなどと呼ぶ我が子

秋田市 鷺谷 美津子
秋の陽に漂白されてゆく私
我が葬列に君も並んでくれますか
ストライクゾーン広がる三十代
やり直しましょと白い雪が降る
肉体の持つ愛しさよ子を抱く
どこいしょただ今妊婦モードです
未消化の夢も一から噛み直す
さあ産休一人四股など踏んでみる
子は二人二つの出産物語
「おかあさん」やさしいしりとりが終わる

松原市 本多 洋子

象は耳から描くちびた鉛筆
スベードのエースは鮮やかな他人
秋の底から這いあがる毀れたマリオネット
青い風紋 父のトランペットが鳴る
朱を雫すかの海溝を浮遊して
ミロの梯子を降りる勝手気儘な蟻
炎を渡って行った尖った鉛筆
ラムネ壺に透ける少年期の屈折
神話こぼれ出す青い夜間金庫
ピノキオが逃げる反対側のドア

花の名を忘れた花屋の雌猫
蛇の皮切れ字を消化していない
きつとユーモアが判るパウパブの樹
抽斗の曲った釘を大事にする
若いポケット鎖を少しずつ捨てる
越冬野菜 うす皮に透ける動悸
川底が浅くて捨て切れないでいる
毒を飲む前にきれいに手を洗う
こぼれ萩 女のがきが続く
ヨヨーでもするか天国へ行って

凍蝶にひるむ不動のふくら脛
一滴の毒したたらすあやめの舌
邪鬼は仰向け春の畏から抜けられぬ
広目天の眉間にひそむ蒼い海峡
天平の柱ゆるゆる雲ゆるゆる
紫の小さきは弥勒 ほとけの座
耳塚さわざわ天を指す耳地を刺す耳
銀杏散る夕日の中の三連音符
水音の聞こえる方向へ逃げる
蟬殻を握って戻らない時間

大東市 柿木 英一

何故此処に居るのか人を焼く煙
野を焼いて涼しくなりぬ味噌醤油
あじさいに帯の昔を問うてみる
忘れたい風景雨傘を捨てて
見知らぬ町の木の陰の椅子を恋う
火焙りのするめ祖国喪失の歌など
大正の影走り来る操車場
わが祭毒消し売りはもう来ない
長い航終る耀く針一つ
蒼い海 十字架 道化師の帽子

渦巻きパンの渦から愛は無慙なり
泣く影は腰かけ飯の母のそれから
毛糸玉転がり母は黙っている
駄菓子屋の瓶の飴玉二等兵
軍歌は尽きた夕日のドラム缶
軍港の夏へ自転車空回り
恩賜の煙草を思う喫煙コーナー
生煮えの平和を紙の皿に盛る
パチンコ屋に赤ちゃんのデスマスク
自転車で行く夕焼けの暗証番号

高松市 みとせ りつ子

山狭のなんの胞子と生まれきて
遊び家にちちも来たれば家霊らも
暁染まる風の家から出勤者
木守りをひとつは亡父にひとつは母に
白茫茫逝きて戻らぬ父は芒
倒影の母を枕にけるさや
母の背は芒降るふる背負い籠
芒野寂光風掬うては身の疼み
ほそほと尖るいのちよ花むらさき
われも巡礼聖者の祈り天上に

梅はころびし遠野巡りの紙の汽車
春陽踏む確かなるものみな彼方
生きとし生けり花の蕾の眩しさよ
水際波立ち遥かなるもの光りだす
桃美味し家族解散劇はるか
愛し子は涙の砂より戴きし
子を沖へ流しつづけていまさら愛
水を飲む所在なき刻を埋めんと
街中に泣く子があふれ水隠る
多種多族パンの市場の人だから

生きるとは暗き証明薔薇ひらく
山繁る霊異怪異を懐ろに
紫陽花を盛る瘦せゆく夢のそれぞれに
梅雨色の月昇りゆくみずおちに
光の沖白い墓標に積む諸手
漂泊す青い月光身に降るなら
眠り入る死とも思しき水蝶生まれ
霧ある未明温もりきらぬ床を出る
痴れて母なおも怨むか一涯を
夢幻かなリングを齧る廃墟夕月

樹下思惟 銀色の道つづく野に
風を拓いていちまいの便りが届く
白きノートに白き落日描いている
視野いっぱいには蟬のぬけ殻沈みおり
闇の深さにわたしを呼んだ雪地蔵
目を覚ます欠けた茶碗の手の中で
蟬消えて父さんの雪につつまれる
振り向けば白い譜面が迫ってくる
始発電車にのった梟の夢
さみしいと言ってみよう梟の背に

一九四三年八月二六日からの死亡通知
右の手に左の手がある春の川
さくら葉さくら陽の濃淡ののどほとけ
猫の発言指先に風が降る
てにをはから帰る筋肉労働車
めし茶碗右脳左脳に足がある
心臓が続いているなだらかな坂道
じゃがいもの花はむらさき生死茫茫
風と婚約いのちと歩いている
死は未体験花びらは川の流れに

ふくろうが地図のない島抱いている
夜明けを信じる樹が私のなかに
わたしは聴いた白い夕焼けのアリアを
音のない画廊にクレールの海満ちる
吐息する風に託した音の列
風を呼ぶカノンの森の青き弦
月ひとつ野火の向こうに在るいのち
つくつくほうし一人はさみし二人もさみし
実のならない山の淋しき知っている
鴉啼くわたしに何をいいたくて

便せんにふるさとがある日本地図
遠くなる時計輪郭二つ三つ
空似かな四月の駅の地動説
さくら散る剃刀負けの男かな
自我の尻尾を踏んでしまった首の皮
一枚の写真の中の天の川
八月多感耳のうしろの硝子売り
風の秋この天空にある裸身
トイレットペーパーの芯が残っている旅路
右の眼の冬としばらく楽しまん

和歌山市 野々圭子

冬の森ひとつ沈めて辛夷咲く
笑つていよう嘘も真もひとつの茶碗
曇天に軽き言葉の列つづく
悲しいのはあなたに見えない鳩の首
少年が庇つていたのは曼珠沙華の傷
きみは未だ白き音符の端にいる
アベマリヤ雪降ることく音の降る
虚しさをいちまい剥いだ冬の駅
笑いのルーツは生きることだった
あなたは居た 水を持ってあなたは居た

札幌市 高田政旗

忌の部屋の子系母系の波がしら
白桃の横顔妻を呼んでいる
風花や眼耳鼻舌わが一身
空は家族で空は具象で静脈で
闇一枚の舌十二支運はひつじ
奥歯から何度も帰ってくる答
失名を通し続ける秋の空
ポケットの雨もどうやらあがりそう
花に水人に人あり南無の指
ここまでは来たここからが地球

大津市 峯 裕見子

盛り場の月割れそうな落ちそうな
しゃくなげを見にゆく話死の話
春が来てカスターネットのゴム緩む
アパートの住所が言える三輪車
熱が出ると誰に逢いたいかわかる
午後四時の妻びたキャベツ奮起せよ
木陰から出て雉子猫に戻るなり
コロッケを買う時の顔忘れずに
カーテンを開けてもそこに窓はある
恩人も積乱雲もただ高し

名古屋市中区 神谷三八朗

捨て犬に名をつけたので捨てられぬ
美人群に妻がいるのがうれしくて
良薬になるお酒を飲んだことはない
母に返す時間通過列車見ている
背信の友来て傘を借りてゆく
花に彩あり 米研ぐ妻がいてくれる
男が生きる拳いろいろに握る
家族揃って見たことのない花電車
鬼にならねば渡れぬ川の水嵩や
深く呼吸して もう考えまいぞ

ゆつくりと自分の影を踏むきりん
Tシャツにファイトと書いてある 暑い
夕顔の種だと言って握らせる
ゆさぶると香りはじめて母のこと
蛇になろう蛇になろうと竹の蛇
貧乏なことをときとき思い出す
慧星の話死ぬのはまだ怖い
ジャンパーを肩に掛けられ見ている海
ピンクから朱鷺色までの二十年
放心という美しい時間帯

頬杖の母を見てから寝つかれぬ
歳とるにいい緑側の日当りだ
差さず仕舞いの傘と帰った母の旅
やがて夕暮れ通るものみな通った
防犯カメラは無い無人売店の大根
敗けて泣く男になれた水飲み場
仲間外れにならぬ程度の手拍子よ
相槌ばかりで妻の夕餉の話
何時の日か父背負う日はきつと来る
近道の橋が落ちて指圧へ行かぬ妻

生国の桜に告げる男運
夕暮れに買えば豆腐は確かに重い
命日のへら台にあるへらの跡
水に似た夜にゆつくり満たされる
柿若葉姉のおなかの手術痕
そつのない手紙を書けば菜種梅雨
悪いことしてない蟻を踏んでいる
流されてしまわぬように炊くごはん
許すとか許さないとか秋の水
そんなこと聞いたたらあかん月昇る

残照の見事さ わたし老いばれか
友達におんながいても邪魔でない
もう胃へ着いたか仏飯の茶漬け
許せぬことの多きよ石を蹴る
打てば鳴る木魚 帰命帰命と打つばかり
きらきらきら仔猫の墓と書いて建て
恨み言かな 供華取り替えてばばの念仏
火の記憶 とろ火に母の豆が煮え
ひらがなの手紙 春はのどかでない
前後左右が空いていた昼の寄席

みんな石になった朝まだバスを待つ
掌が冷える冬の連結器のように
血縁よ馬鈴薯の皮剥きおえる
転がって執着もたぬ石になる
おめんやのかおがのっぺらぼうになる
真冬日の音の欠けてるオルゴール
指を噛むその温もりに狂いだす
青銅の唇にわかに動きたす
大腿で去って行くのは父の影
砂時計の砂を買い足す金がない

真行草 みな忙しい傘をさし
戦いはもう始まっている莢の豆
トンネルの長さ教育勸語の長さ
すり減ってゆく一枚の抽象画
無罪放免さあ転がってゆき給え
目立たぬよう水を零してミイラになった
天秤座すこし怠けていいのです
哭かぬ木をいっぽん庭に立てておく
テネシーワルツ聞くとともにきく株価
ばら咲き切ったか絶頂感の朝

にんげんをたたき続けるジャズピアノ
瘦せた月ごろんと舌が落ちて
駄菓子屋の夢の胡椒にむせている
砂時計の砂に埋もれた父が居る
手くらがり程の闇しかもたぬ父
口あけて鯨鯨海を吐いている
干鰯風に返事をしたくなり
マネキンとわかる顔あり朝のバス
雄弁な縄がぬらりと落ちて
青虫のままでころりと転がる死

この縄もいつかは放つ勝ちいくさ
酸漿もわたしも海を恋うて死ぬ
大都市のたった一つの髪飾り
勝手気儘に洗濯物が揺れている
こつこつと雪の降る夜は人恋し
亜鉛屋根何かが滑り落ちてゆく
エメラルド婚なら積雪五尺なり
落人へ手違いもなく朝は来る
終電車うしろの渦は何だろう
合鍵を探しています陶器市

青森市 齋藤 茂生

父というこめかみあたりの白い雲
告白の発作おさまリトマト噛む
厨房で母は毎日稔をつく
死にましよう駄菓子や酒をかうように
崖に立つ風にすべてが塵となる
寒鰯の胃袋にある僕の夢
春おぼろ中あの帽子が欲しくなり
掌で水を掬って思慕を積む
天ぶらでカラリとあがる雑魚でした
座標ゼロ僕は翼を手に入れた

札幌市 佐藤 幸子

浅き眠りは方向転換するために
春陽はやわらかなりし手枷足枷
平凡が好き砂時計うら返す
折鶴千羽放ちて春の交差点
柿熟れる姉と話がしたくなる
満月を待ちくたびれて飛ぶ蜚
嘘をつく雑木林を味方につけて
迂回路もこめかみもいま水びたし
精霊舟にひらりと乗せる堪え性
まっとうに生きたか川が振りかえる

大船渡市 富谷 英雄

崖つちちラストシーンはどうしよう
エキストラ目立たぬ場所て息をつく
冒険の出来ぬ雑魚から死んでゆく
その先を言いたいペンが落ち着かぬ
不夜城で偽名ばかりが使われる
負け戦尻れぬ橋がひとつある
車座の中の私は共犯者
無人駅昔ばなしがしたくなる
一匹のハエが弱点ついてくる
毒のある話が好きな赤い薔薇

仙台市 芳賀 弥市

消さないで下さい生きる途中で
飛行機のように死んでる蚊一匹
小春日に死ねて良かった仏様
病間や恋の手ほどきしています
ナースの手妻の手きっぱり退院す
虫干しの足よたよたと病後なり
転ばぬ先の杖一本の寿老人
菜の花を毎日食べる後遺症
自主トレや松尾芭蕉の水っ漬
妻と歩いて妻につまずく

嘘ひとつ人を救ったことがある
影武者を仕掛け火花が映し出す
独り寝の部屋にも届くクーデター
満月に少し殺意が満ちてくる
飛び降りるには狭すぎる窓である
禁じ手で僕はあっさり負けました
寺いくつ巡れば薬に死ねますか
帯解いてひとり芝居を幕にする
幻の箱船ばかり売りに来る
死に際の台詞ひとつが浮かばない

目覚しのベルは鳴らさぬ病み時計
死後の世をちらりと見たり救急車
点滴はいや掃除婦のおしゃべりも
春愁ははるか彼方にポータブル便器
尿瓶から漏れてクランケとも呼ばれ
清拭のちんぽことさらもの言わず
病院の垢を溜めてる土踏まず
浮雲よ生年月日を忘れたり
じりじりとカンナは命乞いをせず
父病むをとて許せぬ春と夏

鈴が鳴る方へ群がる影ばかり
幸せの形が見える窓明かり
割り箸の軽さ薄味にも慣れる
喉元でまだ揺れている目撃者
文鎮の重さに僕も身構える
少し芽が出るといじめの包囲網
曲がり角きつと逆転劇がある
真実はひとつのはずが探めている
束縛をされて男になれぬ空
頃合を見て運ばれるお茶がある

烈日へ愚かなものを撃ち込まん
霊柩車あしたは春の水になる
からす啼く親しいふりをするじゃない
一人二人殴り倒せば生きられる
リハビリの軽し重たし車椅子
握られて壊れてしまいうリツツナビスコ
動かねば要らぬ右脚左脚
老人医療費今朝も空咳しています
マンボウがぶかりと来てるナース室
コーヒープレイク油断も隙もない老後

酒とろりねずみもとろり新春の夜
切り捨てた乱と明るい妻の午後
正論を抱いた拳に冬の風
字余りをまだ赦せない父の貨車
北へ発つ日白鳥ほんのり薄化粧
復旧の遅延も見えてくる宇宙
略奪婚にそつと届ける花の束
ぬか床から亡母の叱咤も小出しする
その先の土筆に結ぶ赤い糸
俎に向かう素直になれる刻

生者死者やっぱり海に来てしまう
ゆずり葉や人のうしろがあたたかい
思い出の千代紙 屋根を低くする
またひとつ灯を消してゆく歳月よ
吊うて誰と語ろう 冬日向
墓洗う心に落ちるものがある
生も死も無明の中に残されて
喪の屋根を包む夕日のカタルシス
綿菓子も桜も一夜宴かな
面を彫る 生まれたままの眼を入れて

峰打ちの情けをアナタまだ知らぬ
リストラの男と眠る走り梅雨
萩そよぐ風もロマンも母の忌も
赤絨毯をゆっくり歩く国訛り
涙もろくてまだ出られない露地の奥
想像妊娠きょうもしている紙人形
緞帳おりの働き蜂は釈迦の掌に
巨岩降らせトンネルの中神不在
約束をしてからみえる誤字脱字
八月の雑魚が勅語を誦んじる

眼を凝らす行方不明のわたしの背
わたしを縛る限りなく細い紐
手を洗うたびに川底深くする
月光を宿す わたしの海の底
海の底 ひとつ残していた卵
真空のことはが落ちてくる予感
さよならは言わない スリッパの温み
欠けてゆく 月のほとりで逢うている
透き通る月と寝ている微罪かな
消せなくてわたしの中の赤い月

新潟市 渋谷 美和子

親展の封に淋しい糊のあと
大団円火中の栗はもう爆ぜぬ
挫折など赦さぬ母の小豆粥
生誕百年賢治書店で苦笑い
一期一会今日のさくらにある痛み
辛口の女が髭を剃っている
二・二六、時まだ弁疏などできぬ
巻き返すネガの異国に降る黄砂
故事知らぬ蜘蛛の糸ゆれ河童の忌
禁断の木の実明日を語らない

福島市 西海枝 みちこ

言葉より深く近づく夜明けのコーヒー
昼の月 罪の匂いを持っている
虚ろな笑顔 あじさいの細い首
紫陽花の雨の匂いのナルシスト
青空にはぐれた鍵が落ちていた
秋の海 何と別れてきたのだろう
一筆啓上ころろの一輪さしですか
風ひとつ残していった白い窓
風化する二人の日常かもしれない
記念樹と語る たそがれのベンチ

花巻市 あべ 和香

耳鳴りが続くあしたもきつと雨
渡らねばおとなになれぬ薄水
時給など試算してみるポリバケツ
味噌汁の椀のふちから脱け出せず
五月闇五分遅れて打つ時計
ふり出しに戻って磨く一輪車
点滅の過去、過去、過去よ花の乱
のびすぎたキリンの首をもてあます
花野菊いくつ手折ってきた道か
ひまわりが泣いても誰も気づかない

青森県 北方 草春

生と死を考えている真夏の黄
喪の服の父と闇夜で擦れ違ふ
不整脈私を濡らす春の雨
想うこと想わざること蜚鳥賊
風の音ながないながい渡り廊下
黒猫を一匹生んで長い夜
バスはまだこない無数の蛍の死
強情で雪に埋もれてゆくばかり
私を何度も捨てた夜の川
逆縁ということもある冬の海

ミントの香白い瞑想雪の幻想
問えばまたくるくるねじり花になる
拡げても両手に満たぬ愛の面積
薄水ゆるりゆるりと胸の貨車
押し花もわたしも耐える根雪の刑
雪おんな消えしあたりの一輪草
時機到来きょうこそ籠を脱け出そう
ひな納めはなればなれの姉妹
散る散らぬわたしの知らぬ窓の外
致死量は伏せておく愛のジギタリス

春の雨男って女って
雲の濡わたしは誰を愛したか
求め合うものはあったか花芒
一途なる想い飛行機雲の果て
ななかも愛されること愛すること
くちづけの目を閉じるとき桜咲く
ぱつぱつと斬られて風の岬かな
頬と頬ふれあう距離のオリオン座
唇を愛してやまぬ牡丹雪
シクラメン幼い恋の果てるまで

満月よ去りゆく人ばかりだなあ
午前三時の川をみている死ねたなら
信号が赤にかわるよ牡丹雪
私は未来に生きる花桔梗
しわくちやの千円くれた親父の手
熟睡の川いっぽんの月明かり
ゆらりゆらり水母はほとのかたちして
レントゲン写真中原中也の詩
ティッシュペーパー天使の羽の薄明かり
そしてとらえた蟹をむさぼる生殖器

北海道市 岡本 恵

未来から来た赤ちゃんという家族
始まりも終わりも白に包まれて
もう旅は始まっている時刻表
向い風にしか回らぬ風車
子が増えて母の泉は深くなる
髪切ってみてもなんにも変わらない
疑問符を抱えたままの冬こもり
少しずつ普通が好きになってくる
まん中で写ったことのない写真
文字ならば丸い心はすぐ書ける

母の日が近くて子らのないしょごと
背く日がくるとは思えない寝顔
いにしえの土器に涙の模様あり
毒入りとどこにも書いてないわたし
ためらいもなく割っている生卵
目をとじて見えない物が見えてくる
被告席私も罪を問われそう
半音がずれてきれいなハーモニ
万歳の上手な蟹が笑わない
サイコロの七が出るまで振り続け

青森市 福井 陽雪

髪を掻き上げ瘦せてゆく月と真向かう
雪になる冬を脱こうとした刹那
夢よりも先に行こうとする明日
闇回廊閉じた花屋の戸を叩く
水を請う喉に絡まるものありて
忘恩や点点として無人駅
貝拾う切ないものをひとつ零して
鳥籠で姉啼く夕闇が迫る
桃の傷滴り落ちたのは私
血の濃さよ母おろおろと雪を掻く

薄ヶ原に墨絵の如き母の合掌
親という切ない風の水溜まり
手の鳴る方へ耳塞ぐ男下駄
重かるう太郎の左手の系図
冷凍魚解けゆくまでの長い葛藤
巢立つ子へ砕いたエゴのアスファルト
諍いの茶碗を洗う静かな夜
雨上がり見たことがある駅に着く
風船に繋ぐ応援団のラッパ
川下の男が見せた歯の白さ

明日のない顔微笑めば風に斬られる
虎落笛祭りはクライマックスに
送り絵をゆるゆると引くデスマスク
石になった父を攫って明ける海
かさぶたや海の深さを少し知る
水琴窟失ったもの掌に拘う
雪を待つ言葉遊びの輪を抜けて
冬の陽の何と哀れなやわらかさ
やさしさを噛みしめ戻る雪の橋
アンカーの僕まで僕をまっしぐら

小樽市 斎藤 はる香

寺から寺へつづく昭和史の枯木
てのひらの墓地で老母の眠りぐせ
指先の眼よりこぼれてくる慈愛
霜月の眉寄せ合せて腹式呼吸
身の内の雪玉遊びとひと日暮れ
雪に雪降る白き障子も手品師も
黄泉へ発つ峠 吹雪に遭わぬよう
肅肅と喪服の友の美しき
さようならばかり続いた喪中はがき
折り返す駅に独りの姉がいる

芥子の花四人姉妹の語尾弾む
風花を纏うて母が訪ねくる
主語のない会話母には遠い春
過去の糸ぶつんと切れて母は流れ藻
知りませんか薬と泳いでいた母を
追い越して下さい母はゆっくり参ります
母と分け合う真水どこ迄あの世まで
西陽着て老母の心を汲んでいる
コスモスをいま吹き抜ける死者生者
襖絵の風と語って喪に服す

青森県 福井 文明

春雷を眠らせておく種袋
コーヒーは苦めに春の喫茶線
降りるべき駅だった 蒲公英いっぱい
耳底の瀬音ほろほろ夏蜜柑
ねじれた思い出 線香花火ぼとん
前向きにあっけらかんと心太
優しさとしての新ジャガ芋の皮
遠い日の夕焼けがまだやって来ぬ
人想う首あたりまで真冷えなり
屯するのは散らされた優しさたち

ジャム壺の底 祭りの後の裸眼
今更ですが川の始終を聴きたくて
あわだち草 父の敷居を低くして
くすむ紫陽花 掌は返される
確信犯の虫一匹が這う胃壁
ドアをびっちり 絶叫したくなる
脱ぎ捨てられたシャツにある人疲れ
鬱陶しきは反射してくる黄ばみ
そんな眼で僕を断定せぬように
自分自身を抜ける遠心力

みんな淋しいのに夜が瘦せてゆく
眉間どんより 豆腐きっちり養の目に
振り向きざまにペコンとへこむ飯面
僕であることの底面積を考える
戸惑いトワイライト 告げねばならぬ事
双曲線どちらが悪いとかでなく
月はどっちにもパレルな空ふたつ
ひとりぼっちの輪唱 黄菊むしっている
浮き沈みする月 おいでおいでする
信じきることよ四つ葉のクローバー

寒月光逝くもの逝って爪の反り
あやうきもの追って菜の花まっ黄色
何欲しやまだ落ちて来ぬ栗の実と
かもめ漂流したぬ翼も愛なのだ
曇天の手紙にすこし風がある
変わらんと皮膚いちまいに朱を放つ
ゆるやかにカンナは狂う夏真昼
すれ違いざまに討ちたるももさくら
魚影濃し十枚の爪しなやかに
花びら囓む女がおんな憎むとき

蒼天の果てまで眠る赤い靴
顔のない女が海へ歩き出す
塗り箸がいっぱんさむい日を跨ぐ
何を急いでいちめん桜の中に
手に拘う水の輪ひとつ水になる
麵を煮る過去がずんずんやせてくる
指先のただひんやりと桃の傷
手の石の熱くなるまで握りおり
落花しきり父の帽子は重かった
胡蝶蘭並べて部屋の暗きこと

八戸市 横澤 あや子
こっち向かぬ真昼の百合もエゴイスト
まな板の死角に咲かす黒百合よ
裏切りの手の湖深く澄んでいる
爪で掘るばらばらりとわたしの葬
子は旅にわれの挽歌はわれ唄う
何の傷だらう菜の花のまっさかり
飴いろの糊をはがせば共犯者
もう一度抱きとめてくれるなら海よ
いちめんに緑青ふくまでは女
今日遇ったものはかげろう大根煮る

守山市 徳 永 政 二

青い山ときどき通る青いバス
海の見える丘に黙って連れてゆく
コオロギのまだ鳴くことのできぬ翅
壺の中こまかい雨が降っている
電柱のてっぺんで啼く強く啼く
一匹の蠅の背中が光り出す
カマキリのカマのところをじっと見る
犬小屋の中に入ってゆく鎖
ひざを折り小さな箱の中にいる
うす暗くなってからでも遅くない

鳴く虫の鳴かなくなつてからの土
磨かれてさらに儚くなつてゆく
裏側をはっきり見せて死んでいる
階段で大きな音がする棺
病院の裏の小さな庭にいる
ハンカチをずっと握つたままである
白いシャツ白いボタンがついている
あわてると袋のからしピュッと飛ぶ
できましたできましたよとてくる
辛抱をしよう電車の中である

驚いてまっすぐ飛んでしまふ鳥
あやまっているがボタンを押している
とんぼから少し離れているとんぼ
この店はまんじゅうだけを売っている
くしゃくしゃになつてしまつてからの月
虫は葉を端の方から食べている
ややこしいところを通つてきた机
辛かっただけのカレーの店を出る
一枚の枯葉の下の虫になる
奥行きを見せて雷消えてゆく

高松市 佐々木 栄 一

塗り替えて 少しみだらな春の椅子
曲り角でつると剥けた茹玉子
幽体離脱ごはんですよと呼びにくる
春の夜を濡れ雑布で拭いてみる
足跡が点々とある市立図書館
真ん中で虹がボキリと折れる音
穴だらけの時間が転がってゆく余白
紙の月が見ている見事な断末魔
神様から長い手形を渡される
チャンネルを回して澄んだ空さがす

フリーハンドで虹の続きを描いている
養殖の鬼だ ちっとも恐くない
気まぐれな影で時々いなくなる
無花果の葉っぱで隠す進化論
猫も女もずばらな雌を熟演する
ホルマリン漬の目玉に見つめられ
曖昧な明日を彫つてるゴム版画
塚詰の鬼もときどき振つてやる
満月が下ろしてくれた縄梯子
言訳に耳を貸さない焼きギョーザ

五体投地の前を横切るクロネコヤマト
みずみずしい言葉を探す潮干狩
コーランの聞こえる街で受胎する
洗濯ばさみに吊した嘘が乾かない
走れメロス バナナはすぐに黒くなる
年寄りの指とすり替えられている
脳細胞の一つ二つは女好き
回転寿司の速さはキット畏だろ
フラスコの中で小さな虹を飼う
雲形定規でちよつと歪な夢を描く

新潟市 谷 沢 けい子

落ちそうで落ちぬ椿をただ見ている
春泥を前に仏足の美しさ
思い出す尋ね人あり金木犀
花びらの軽さに急き揺らす万葉
孤独死も死ならば髪に受ける花
風花に触れる蕊なし陽と戯れる
美意識のひとつ蕾のバラでいる
涅槃図に添えるピンクの八重椿
年下の男に甘え合飲の花
桜折るべし母になることはなし

老鶯の拙さ溜まるぬいぐるみ
愛したはひとりキャベツに入る亀裂
繭籠り蝶のまぐわい見た日より
春愁の心身揺らす基礎体温
虫しぐれ赤子の声に苛立ちぬ
ぬいぐるみ鏡にして笑われる
花芒解けて何時しかててなし
鮭の卵ほぐした指で鶴を折る
繋ぎ止める言葉探して冬柏
来年も雄花としての烏瓜

布団の軽さ少し疎みて夜の秋
母の娘になれずじまいの絹の染み
ぐうたらに生きてもみたし扇の香
夕日背に左の脳で造る虹
蟻地獄明日へ眠る寝待月
指は母似 斑に剥ける烏賊の皮
切れぬ出刃さびないように拭いている
泣き足りず解けぬ鬼面の魂結び
疲れたか弱者への庇護懐かしむ
再生紙に書く叙勲の推薦書

大宮市 佐藤美文

多数決指の太さに紛れ込む
忙しいだけの手足を持て余す
多数決さてどの指になびこうか
浪花節流す汚れた川ばかり
バス停の知らない街の知らない時間
人のいい傘が海から帰らない
待たなくていい時計から狂いだす
定期入力でジョーカーが折れていた
中指の長さにまといつく噂
ウォーキングシューズ地球が軽くなる

たっぷりの風と遊んだ花迷路
丹念にただ丹念に石を積む
平凡な男ありけり人愛す
同情されて牛の胃が荒れる
正論という無邪気を憎む
女房もおんなじ鍵で開けたがる
五十八歳の踊り場でピエロになれる
五十八歳の踊り場に立ち尽くす
団らんの手品が下手なまむし指
桜散るひとり残った雨男

北海道 野村禎子

タンポポが咲くとばんざいしたくなる
花束を枯らしてはならぬ殺してはならぬ
指切りなんて霧かも知れぬ霧かも知れぬ
よく切れる包丁だった無口だった
憶病になったか鍋つかみを探す
仮装行列の中に私がいる安堵
いつも笑ってバケツの中の水でした
窓の花あしたに残す自尊心
涙線がさびたかやけに塩っぱいね
まだ揺れる心があったスーパ皿

癌告知そしてひっそり汽車が出る
死にたくて死ぬ筈がない蟬になる
さくさくと私を食べる夜盗虫
雷が遠ざかるお酒が飲めたらなあ
ひとつぐらい思いどおりになれ花火
なくさめて欲しいと思う波の数
ノックをされなくなったドア 私
百年たったら私を起してください
浸食作用が始まる私の海岸線
干鰯海を吸うたか風を吸うたか

はがき一枚たっぷり雪を積もらせる
寒の入り他人ばかりの船にのる
眼の奥にひまわりが咲く雪だるま
今日も雪笑い話にしてしまえ
こんなに降って来るのは雪だけじゃない
家中の鏡が笑え笑えというのです
ぶらすまいなすぜろがパジャマを着る
荒れ狂う吹雪を羨しいなと思う
もう誰も還ってこないしばれ雪
吹雪かねば雪も桜も私も

青森県 諏訪夕香

クローバー一面嬉し涙の海になる
雪まろげあなたの闇を渡りゆく
喪の海に雪ひょうひょうと髪洗う
蒼穹や桐は真白に弧を描く
子殺しの蠟人形と一夜住み
病室の見取り図にある馳だな
放心の私の中の水たまり
涅槃閣こだけ一面 さくらさくら
竜胆やあ父の鈴母の鈴
永劫は断ち切り私の川流る

合歓開くそれは私のスカンダル
カンツォーネ絶唱罪一面に浮き出す日
写経してうからやからの舒聞く
生き仏カンラカンラと笑う宵
霸者たらん転げ転がる百足かも
レモン輪切りにちりちり痛む母心
門をガラガラ抜いて怨みごと
寅さんのリックの中はオアシス
隠亡の火箸哭く夜は眠られぬ
双眸の恋ランランと果し状

和歌山市 神平狂虎

山姥を訪ねむたましひを杖に
出港前夜太きことはの樹を植えむ
街に棲む武士老いたりて濡れる肩
水洩をすすり独りの夜を掘りぬ
をりをりの逢瀬へ水を汲み溜めむ
春駒のごと美しく水飲まむ
着地点捜しぬ夜のサンガラス
陰陽道の網目を抜けよ白き魚
よく澄んだ音を零しぬ指物師
暮らし儚しく両面打ちとなる太鼓

川魚の香りを愛するとき鬼に
風掬う絹の手ざわりして酔ひぬ
睡りの底へ誘う鱗重なり
刻盗む音は呪文のごとながれ
野遊びの果てに横たう難波船
指先が昏くて泳ぎきれぬ街
墮落から墮落へ秋の索道よ
てのひらに未だ明けやらぬ濁った川
空瓶の中の己れは瘦男
胃の腑へと落とす己れの忌日かな

折節に神の類いの蛇とあう
男はをとこの中の白へと疾走す
限りなく雨曳きすつて蛇が這う
霞む眼を擦り己れの尾を抱かむ
飲み込んだ毒美しく星が降る
蛇泳ぐ空気が薄き北の部屋
鈍痛や秋の後ろを流れけり
雨避けむ小さき言葉傘にせり
霧は解けて静かな湖となる小部屋
繰り返す十念和讃 露拾う

灰にすれば葱の肥料になる柳誌
雪ん子と遊んで雪ん中に死す
バス停は焼けてもバスはやってくる
ビストルを捨てて夜中のラーメン屋
音楽が欲しい冬眠中の蛇
僕の手は十四玉の匂いだな
置き去りの犬が心臓から凍る
愛なんて俺はお寺の竹ぼうき
マネキンはいきいき笑う怖い店
桜咲く先生はまたヒステリー

来週の約束もする日曜日
二日酔いしそうな手紙ありがとう
ほろくそに言えば背筋の伸びる人
眠れ眠れ海より青い勾玉よ
自分だけ幸せそうに眠る猫
文具屋のおばさんいつも上の空
千年をもだえもだえて樟若葉
威嚇する猫に負けるな青風
どの雛も身内びいきの面構え
犬に顔紙められたかて怒りなや

西宮市 岩佐 栄三

去る者は去れとも読めるお詫び状
沈黙が続く冷蔵庫のたまご
バカボンのパパになりたい夏休み
敵も味方も自滅しそうな暑さかな
台風と先祖の霊の来る気配
喧嘩すると支離滅裂のおねえちゃん
全身の力が抜けてゆく蒲団
どんぐりを掃く面白き阿呆らしき
いろいろなものが沈んだ神田川
新天地もう異端者と呼ばせない

東京都 山本 忠次郎

散る花の向こうを見てる病理学
片方の靴ばかりある観覧車
聖書の染みが少し動いた春昼
水面が笑い水底を癒している
気化する気分老斑の二つ三つ
命綱にふれて戻ってくるこだま
なかなか潰れない本の中の鼻
鳥の目をいっばい感じる完全花
時間を足すどっとこぼれる時間
辛いところばかりにいる無罪感

穴蔵の奥に落ちてるつけ睫
陰干ししてある濡れた住所録
距離を詰めて来ている幻覚の亀
甘い夢どさっと物が落ちてくる
朝脱いだのにもう薄い殻が出来
ぬいぐるみからのこのこと犯罪者
闇分けている闇に住む者達で
野ざらしの国旗を焼いて上げましょう
火花二つぶつかり合って行く黒衣
無感動に老木が倒れた

覚めそうな夢を懸命にとぶ鳥
暗がり手ごろで騙されてやろう
ゆらゆらと鱗が付かず離れずに
目を瞑ると穴は大きくなるばかり
飢え知らずゴム風船が飛び交って
体から出てくるものは僕のもの
相殺を拒み続けて来た風船
控え目と言うのでもなし葡萄の花
無駄骨がやわらかくなる擬似体験
侍の死は美しい朝焼けです

したたかなユーモア

海堀酔月氏（堺市）を推す

尾藤 三 柳

今回、手許に届いた作品は、九四作家、二八二〇章。作家の世代別では、六〇代がいちばん多く三〇名（うち女性一七名）、ついで四〇代の二四名（同一三名）、以下、五〇代二二名（同一四名）、三〇代八名（同五名）、七〇代四名（同三名）、八〇代四名（同〇名）となっている。

八〇代はすべて男性で、最高齢が八七歳。三〇歳を最年少（女性）とする三〇から七〇代までは、すべて女性作家が過半数を占めている（男女各一名は年齢・生年月日の記入がないので除いた）。

こうして見てみると、男女ともに参加年齢は四〇代から六〇代が中心で、その中のピークをなすのが六〇代である。偶然のおもしろさというか、同じ六〇代といっても、ことし還暦を迎える作家が七名（男四・女三）もいることは見逃せない。

何年か前に書いた時にも、同じような結果

が出たように記憶している。これが川柳界全体にそのまま重なるかどうかは別として、Z賞に関する限りでは、五〇代後半から六〇代前半までが、作家としての平均的な働き盛りということになる。

私の推薦作家も、四〇代（六〇に集中（一三名中一〇名）しているが、第一位に八一歳の海堀酔月氏（堺市）を推すことには、ほとんど迷いがなかった。

この作家のしたたかなユーモアには、端倪すべからざるものがある。いまの川柳に欠けている領域を、かたくなに死守している印象がある。

人間を踏んで三階まであがる

捨身飼虎ゆっくり梯子から降りる

こんな風景を描き出せる作家は、ザラにはいない。

以下は別表の通りだが、どの作家にも三〇

章の中には、首をかしげたくなるステレオタイプが顔をのぞかせている。それをバッドマークとして、減点の少ない作家から上位にランクアップしたつもりである。

そうした点については、今後のためにも触れておきたいが、この紙面では言葉が尽くせず、いたずらに誤解を招くおそれがなくもない。で、ここでは、個々の力は持ちながら、作品の選択に妥当性を欠いたり、ペース配分が充分でなかったために、最終的には一三名の中に入らなかった作家へのせめてものはなむけに、秀句各一章ずつを掲げておきたい。

手鏡の中もやっぱり土砂降りか
眼の海にいつびきの魚育ちゆく
やわらかい紐を境界線にする
飛んできた石人間のにおいする
多数決指の太にさ紛れ込む
温かくなる切り株を選っている
花守りの時計狂わすわが暮色
熱が出るど誰に逢いたいがわかる
サヨナラを言わない人の立ち泳ぎ
寺から寺へつづく昭和史の枯木

かずこ
千絵
朱夏
トキ
美文
明良
道代
裕見子
むさし
はる香

いまを書く

細川不凍

六年振りに選者に復帰してのZ賞の選。応募者数はかなり減ったようだが、30句が不毛の情景のように見える応募作品は殆どなかった。応募者各々の30句が放射して行く熱気の手応えを十分に感じての選であった。

現代川柳は現代を生きている私達によって書かれる川柳である以上、いまを生きている自分(又は他者)を書くという作句視座を明確にしなから、自己の人間性が息づく川柳であるべきだろう。そのためには、主体となる意思はしっかりと持たなくてはなるまい。

〈特選〉樋口由紀子

おたまじゃくしを死なせてしまふ深い息

順番に親とはぐれていく絵本

大きな旗が振られて父が死んでいる

由紀子作品からは、自己を書くにも他者を書くにも、決して感情に流されまいとする冷徹な意思がはっきりと読み取れる。いまを生きているものだけが感取する哲学的な認識

を、イロニーをもって直感し、試みられる非情性は逆説的な有情として、作品に奥ゆきを与えている。澁刺とした批評精神が眩しい。

〈秀逸①〉長井すみ子

綾取りの橋の途中のいもうと忌

勝者だけ残る水面の花ひとひら

思いつき露出オーバーの句には抵抗を感じるのが常だが、このような思いを沈潜させての爽かなイロニカルな趣には感興を覚える。一句の中に無駄な言葉がないのは、自己の作句スタンスをよく心得ているからであろう。

〈秀逸②〉島道代

白杖の行くさきさぎさの海鳴りは

いくさとは一人のものか桜闇

傷みを抱いた30句。みな無常の風に誘われる趣が見て取れた。生の苦澁を噛みしめつつ、孤心の展がりか抒情をひき寄せ、作者はいよいよ清澄な世界へ入って行くようだ。内部に差し込む感動という一条の光を求めて……。

〈秀逸③〉清水かおり

体内の葦は父より継ぎし青

神の書は葉のようにわが裸身

題材を自己にひきつけて書くことのできる作者。そして、そこに生じる思いの所産である抒情の質は高く、清冽さを伴う。凛とした抒情を書ける稀有の作者として、年齢的にも若く、将来が実に愉しみだ。

佳作に推した十二氏の個性も賞揚したい。

特に、高田政旗作品・情野千里作品からは、

上昇志向(意欲)が強く感じられた。

〈選外佳作〉

一筆啓上 天に抱かれる雑草の骨 千 絵
春雷を眠らせておく種袋 文 明

迂回路もこめかみもいま水びたし 幸 子

子を沖へ流しつづけていまさら愛りつ子

わたくしの弱いところに着く手紙 京 子

よく切れる包丁だった無口だった 禎 子

父の牙がついて二月の旅に出る 明 良

命綱にふれて戻ってくるこだま 忠 次郎

壺を描く 中にワタシの居る如く 眞 里子

禅問答ぼとりと落ちる秋の蠅 蘭

時効になった帽子を流す秋の川 めぐみ

暗闇を甘くなるまで囁んでおり ち えみ

二十一世紀への示唆

リアリティーとうがち

橋 高 薫 風

情野千里氏

おとうとに口紅を買うひなげし橋

哀願や喉に星屑刺さるまで

ハレム混雑して夏期講習を聞く

などの作品に接すると、現代を写すセンスある川柳を感じ、来世紀の作品への示唆を得るように思える。時代の相や人間の像を明確に言い得ている。

特選から佳作に至るまで、私の推した作者たちは、ひとしく好作家と言える人たちだから、今後も精進を積んで川柳のリアリティーとうがちを後進に伝えて頂きたい。

木本朱夏

海の青ひとつぶ耳にぶら下げる

聖書売り鬼の館の扉を叩く

わが死後の黄菊白菊もつべし

眉描いて守るべきもの何もなし

猫を抱き離婚記念日雨になる

実際、この世というのは、人生とは「難境

の間をめくれば魑魅魍魎」なのだ。年々腕を上げている証拠に句柄が大きくなったが、テクニクに走った句は浮つくことに御用心。

白藤 海

朝顔の今年はじめて咲く色は

諦めは微笑みになる秋桜

わたくしの鍾のようにいちようあり

この作者の今年の句は植物が目を引き、最初と最後の銀杏をテーマに詠み続けたらと思う。いちようは魅力ある樹だから。また、サイダーの泡やピアスの句のように哀しみや毒を詠んでも明るい感触に受け取れる空気がある。個性があるのだから元の雅号で押し通してほしい。

東川和子

おはようございます費の朝に浴け込んで

白色だねえ初七日の夕顔は

トルコ桔梗がきれいと言って母が泣く

忘れられずに捲られていた義父の日巻り

義父の分まで作ってしまうハヤシライス
人が逝く空に白練ひとすじに
生涯という二万七千八百三十二日

図書館の本は返しましたよ お義父さん
腹部大動脈瘤破裂で亡くなった義父への惜別の三十句は、最後に「風は風のまま私は私のままきょうも」とある故自らの鎮魂の詩か。

柴原道夫

君の瞳の中の八百八橋かな

エスカレーター僕のとなりのペンギン君

鷹に飼われつつ男恍惚たり

これからの作品は暗喩、感性の中のがちの関わり合いと批判が重きをなすのではなからうか。

と述べたところで、一般応募句には内容に焦点の定まらぬ作品、句語のみ浮遊している作品が多かった。

伝統の短詩文芸を更に開拓して行く作者は
一先ず短歌(和歌)、俳句、川柳の古典を通読、鑑賞の文献に親しみ基礎作りをするのが必要で、上達の早道であるように思う。

選者を含めた指導者も大切だが、川柳と称する亜流に対抗するには、魅力ある作品で勝負する作者が増えるほかはないのだ。

選 後 感

吉 田 健 治

私だけの感想かも知れないが今回の選をし
ながら何か胸に迫ってくるものが弱い感じが
した。決して低調というのではないが、燃焼
度、緊張度が薄いのである。好作家、秀作家
が巣立っていったしまった所為もあるが、何
か弱いのである。そうした状況の中で選んだ
作家は――

特選 普川素床

今までの努力の成果が実ったようです。一
句の完成度はもう一つという所ですが、何よ
りも氏の実験精神が貴いのです。俳句、連句
にも手を染め実践してきた成果がここに存り
ます。文体も独自のものを作り上げました。

本当を言うまで影をくすぐりつづける

あとがきの死体をオキシフルで拭う

ごはんほかほか顔の左右の不思議なずれ

半具象というのでしょうか、抽象の域に足
を踏み込んでいながら、しっかりとした具体
感を備えています。これから期待。

秀逸① 広瀬ちえみ

昨年度よりやや質を落としたかな、とも思
いましたが、やはりその視点はユニークで
す。文体も柔軟で独自のものを持っています。

暗闇を甘くなるまで嘔んでおり

お隣りも血を出しながら吠えている

額縁を抜けて出かける星祭り

日常をシュールの手法でシュール臭くなく
描き出す方法に長けているようです。あくま
でも自然体で提出するので臭みがない訳で
す。今後も期待が持てます。

秀逸② 樋口由起子

昨年に父を亡くされ、失意の年であったよ
うで、句に密度が少し欠けましたがやはり自
分の世界を開示しております。

順番に親とはぐれていく絵本

閉じ込めた狂で膨れるビニールホース

大きな旗が振られて父が死んでいる

今年は更に飛躍の年であって欲しいです。

秀逸③ なかはられいこ

今回は今迄より密度が薄いように感じられ
ましたが、やはり切口は新鮮で、作品に明度
があります。これからはより深い沈潜が課題
となるでしょう。

痛む箇所 線をつないでゆくと鳥

海光る 切嗟琢磨というこぼ

瞳の奥のそのまた奥の針葉樹林

佳作1の西秋忠兵衛氏は一句一句の粒とい
う点で秀逸に入れなかった。次回に期待。

今回の収穫は、佳作2に取り上げた清水か
おりさんである。一句一句に密度があり緊密
な文体を持ち結晶度も高かった。完成してい
る作家である。次回が楽しみです。

選外になりましたが病後の芳賀弥市氏と、こ
高齢年ら頑張っておられる加藤正治氏に注目
致しました。

補助線をいっぱい引いて立っている 京子

木馬は風で祥月命日銜えている 悦子

春ゆくや辻ごとに積む陽の檻樓 道代

梅はころびし遠野巡りの紙の汽車 りつ子

あなたの帰り待つて私も煮くずれる

美津子

選 後 評

描かざるをえぬもの

酒 谷 愛 郷

今回計らずも前回同様に抒情作品を上位に

推したが、期待した若手作家に、もう一つの
伸びが見られずに残念に思われた。

「Z賞」に関して一部に、抒情作品や其グ
ループ作家の方が優遇されているとも受けと
れる批判もあるが、作品の評価に抒情的、知
的云々で判断されるはずではなく、偏に
作品の内包する情趣等がいかに充足し、鑑賞
に価するかがなにより重要でありたい。

仮に安易な同情移入等で、作品選考ができ
るとすれば至極楽なことでもある。「Z賞」
作家の名誉のためにも敢てふれてみた。

特選 板東弘子

秋霖止まず泥田を抜けてゆく父が

水面に映す亡父母は笑ったか

鏡掛け下ろす雷光疾るのて

弘子作品は、それほど熟達さはないが、感
情の高揚を努めて沈静させながら、作品成就
の意思を今回の作品に少し見えて好感もてた。

秀逸 島 道代

描かれた日輪までの長い階段

春絵巻笛に目覚めし人ら来て

道代作品には、安易な同情など微とも必要
とせぬ、真摯な詩情には瞠目すら感じる。

「不幸な人にいろいろ教えられることが多
い」と某人の便りにあるように、「白杖の行
くさきさき海鳴りは」(この先は夢見るよ
うに花筏)等も私情の甘さを抑え得ている。

心が映すものや胸の鬱屈の発露は、道代さ
んの命と自己の確認の縁でもあろう。

秀逸 柴崎昭雄

ひたすらに蟹食う 遠い少年賛歌

月は浮くべし青き梯子は伸びるべし

昭雄作品は、大方の対象物が本人の目線よ
りも高いという状況は、ある種の恐怖とも推
察できる。月下に呼応する青き梯子は、昭雄
作品の新たな展開を待っている。

秀逸 樋口由紀子

布団から父の頭が出てこない

父の死後爪切することも不思議なり

今回の由紀子作品。「父」連作には単に創
作するという意思ではない、書かなければい
けない」という亡父への哀惜が、作品の深化
を見せてくれている。(布団から父の頭が出て
こない)は、一句立てではやや弱い、が、亡父
作品との並立によって、より際立ちを見せる。

佳作の西秋忠兵衛さんの飄乎たる語り口は
貴重な作家でもある。(おとうとも六十すぎ
て空を見るか)の私情の温かさ懐しさよ。

その他の作品

おとうとも六十すぎて空を見てるか 忠兵衛

父帰らざり母ほど知らぬ露の臺 晋一郎

野を焼いて涼しくなりぬ味噌醬油 英一

水の音母に余命のことしかなく 流青

山狭のなんの胞子と生まれきて りつ子

おとうとに口紅を貰うひなげし橋 千里

解体の家屋も父も仁王立ち 眞里子

前向きにあつからんと心太 文明

やがて夕暮れ通るものみな通った 三八朗

足裏を指で準えそれ以後無 和尾

邪鬼は仰向け春の霞から抜けられぬ 洋子

眉描いて守るべきもの何もなし 朱夏

閉塞の世を切り拓く内なる精神へ

佐藤 岳 俊

早春の雑木林を歩くと、コゲラ、アカゲラ、アオゲラの啄木鳥が一心に幹をつついて

いる。二十世紀のはじめ、石川啄木は「時代閉塞の現状」を書き「明日の考察」と叫んでいた。世紀末の現在、物質文明はトンネルに突入し、縄文人の残した青森の三内丸山遺跡をトップに、縄文人の精神が光りだしている。

特選 広瀬ちえみ

ばったりと出会う失くした半分と
透きとおって見える手足になる部分
壁の絵のりんご一個ずつ消える
お手洗い借りるこの世の真ん中で

日常の目の裏に存在するものを、凝視しつづけている。その対象を躰に取り入れ、棘を刺す感性で、ペーソスを吐きだしている。

秀逸① 岩崎真里子

大根を切っても切っても雪花火
捨て菜こぼし菜雪と契りて春を待つ

大根も捨て菜も、冬へ向かう顔で生きる。その顔にしゃぶりつく姿が見えてくる。契るとは必死の形でもある。

秀逸② 宮本めぐみ

人生の出口に置いてある花輪
生きたいかと問うているのは冬の天

花輪も冬の天も、自己責任の客観視である。本当は自らのヘソのあたりに問いかけているのだが。全体をつつむユーモアが生きる。

秀逸③ 鎌田京子

コスモスが頷いたので産むことに
ぐっすりと眠るナイフを研いでから

日常と非日常を虹のごとくつなぐ精神があふれた。美しい形の裏側に、自己の影を凝視している。鋭いナイフがちらついている。

総じて、自分が何を川柳の錘にしているのか、と迫ってくるテーマが少なかった。

又寺山修司の短歌で使用した言葉をそのまま

ま使用している作品もあった。自分の体を通してこそ、自らの言葉になるもので、言葉に

独占は無いが、自己の世界を深く広げていく精神が、現代川柳にのぞまれる。

閉塞の世で、個性のひとつをたずさえ、この閉塞を切り拓いていく精神を、と希求している。Z賞へ幾度も挑戦して欲しい。

啄木鳥が雑木の幹をつつく音が、頭上から聞こえてくる。二十世紀はじめと、二十世紀末の時代閉塞の中で、啄木鳥は石川啄木の影を落として鳴きつづける。心に残った佳作を最後に掲げたい。

虚ろな笑顔 あじさいの細い首
まっすぐに鳥墜ちてくる洗面器
こつこつと雪の降る夜は人恋し
無人駅昔ばなしがしたくなる
病院の垢を溜めてる土踏まず
胎内で一回転を学びけり
げんじつはキウイの種に負けている
許せぬことの多きよ石を蹴る
生きている 鳥は終日話し合う
門をガラガラ抜いて怨みごと
味噌汁の椀のふちから脱け出せず
正論を抱いた拳に冬の風

みちこ 昭雄 幸子 英雄 弥市 忠兵衛 三八朗 三千子 夕香 和香 美和子

情景との係わり

岡田 俊 介

今年も、作家の置かれている情景がどのような形にしろ見えて、作品としての昇華あるいは作家的処理がなされていて、しかもオリジナリテイのある作家を上位に推薦した。情景は個々の作家によって異なり、それ自体選考の対象とはなり得ないが、情景との係わり方には作家性があると思う。上位に推薦した作家は、情景との係わりを確かにもっていたし、作家的処理にも優れていた。その中で特に作品のレベルが揃っていた大谷晋一朗さんを選選とした。

大谷晋一朗さんの作品には、情景そのものに特徴があり、ことに野や樹へのこだわりが加わる時、読む人を彼の世界に導く。『悪童の山降りてより梅が咲き』など、その位置から不意を突く面白さがある。彼の技法は例えば、『「家にお帰り」婆の手先の敷動く』に見られるごとく、適度に抽象化され、題材を自身の置かれている情景に求めているの

で、現実感を漂わせる。

島道代さんの美しい情景の中の哀感に誘い込まれる。『白杖の行くさきさき海鳴りは』の作品に見られるごとく、控え目に、それでいて主体性を押し出している。自身に始まって情景の先に花開くその花の色彩に目を見張るものがあり、確かな比喩がより効果を与えている。『この先を夢見るように花筏』の作品など作品から情景が降ってくるような印象を覚える。

清水かおりさんの情景の切り口の瑞々しさは、一つ一つ丁寧に切取っているからである。そして『水音は深夜聞こえる汝が身体より』『ふりかえる兄も彼方の虫籠に』の『水音』や『虫籠』などの心象イメージを用いることによって作品に新しさと広がりを与えている。

樋口由紀子さんは、無作為に情景を切取っているように見える。むしろ作品化のプロセスに特徴があると言うべきかもしれない。

『南から桃売りが来る午後の椅子』の根底にあるのは二物衝撃の手法であり、表現に的確さを増している。

板東弘子さんのしつとりと奈良を詠む作品には味わいがあった。父の題材をはなれたところに位置するそれらの作品には、独自性があり、佳句に数えられるべき作品群である。

柴崎昭雄さんの句集から、この人の作品への理解が増したが、『まっすぐに鳥墜ちてくる洗面器』に不安げなところの動きをよく表わしていて、感覚的な表現力を増している。その他感銘を受けた作品を挙げておく。

青空は 壺の中まで降ってくる 三千子
絹を吐くように娘が病んでいる 修
百年祭ふくろう変わらぬ声で鳴く 和香
その先は母が育てし蝶の視野 眞里子
ノンフィクションの長いながい霧笛 めぐみ
水面のゆがんだ顔を手に掬う ちえみ
閉じて開いて氷点の瞳孔 トキ
考古学者のように春を尾行する 理恵
木枯らしにいろは散りぬるおでん鍋 はる香
霊柩車あしたは春の水になる 弥市
自転車ときどき入れる青い空気 京子

明日のために

寺尾俊平

Z賞の選考を終了した。多士済済の作家の作品の中から選び出すのであるから、かなりの精神力と体力を消耗した気がする。その割合に選んだ作家は、例年候補に挙がる作家が多かったのは、やや皮肉めいた感があった。特選の西秋忠兵衛は、全句に力が漲っていた感があり、明るくて屈託がなかった。

ムルロアが亡くした椰子の実の番地

胎内で一回転を学びけり

行きつけのめし屋で生きたふりをする
 など結構エネルギーなものを抱っている。将来、川柳界の希望を持たせる作家だと予感して強く推薦をする。

秀逸の一として去年も華やかでしかも瀟洒な作品に魅かれていたが、今年も精神的な作品を発表している、なかはられいこを推す。

髪軽く揺すれば落ちる人や鳥

一本の樹として君の前に立てり

幸せが降るよ螺旋を描きながら

など、繊細な中大胆な表現に敬意を表したい。

秀逸の二として木本朱夏を推す。長い低迷から、ようやく抜け出した感じのする最近の彼女の作品は、平易な言葉で一市民としての情感を洩らしている。この作家は天性というよりも、努力の人だと信じている。明日を期待したい。

やわらかい紐を境界線にする

猫を抱き離婚記念日雨になる

秀逸の三として、磊落でしかも親しみ易い作品を発表する梅崎流青を推す。彼の語る朴訥な九州弁そのもののような作品を私は高く評価する。

豆ごはん故郷を持たぬ人と食う

台風の一夫多妻の国に生まれ

一応今年の賞の候補作品の特選秀逸を選んだが、大切な作家を佳作に入れた。それは柴崎昭雄である。なにか彼には天性というもの

を神から授かっていると信じているが、作品がまだまだ甘い。中途半端な妥協で彼を推すべきでない判断した。彼も次の世代を担う旗手だと信じたからである。

薄紙の夜に薄紙の人体図 昭雄
 犬小屋の中に入ってゆく鎖 政二
 人間も冬も忘れたかたつむり 眞里子
 神様の人指し指を引っ張って 由紀子
 受話器からこぼれ続ける擦過傷 仁
 丹念にただ丹念に石を積む 美文
 森番のように古本屋の店主 美津子
 調理場の隅に追いやられたロダン 俊太郎
 昆虫の思考回路を考える 乃里子
 ゆらりゆらりと水母はほとのかたちして 草春

ある選後感

片柳哲郎

新進作家が掴む川柳文学賞であって欲しいZ賞であったが、結局は知名度の高いベテラン作家がずらりと横顔を並べる結果となったようであった。現代の川柳でも、予期しないものの発掘は、予期していたものに極まってゆく。そうした創造が、短詩型作家として如何に大切であるかを主作品を通じて痛感した。

清水かおりさんの一連はそれが美しく凛たる姿で表現された質量のある作品であった。自分の中のを造形してゆく秀れた手腕は未完の生の燃焼から、喪失した生への回復へと移る現代の美学が込められていて、そこにさまざまな意味の投影があった。俳句と違い川柳なら成しうるであろう課題を包含して究極へ誘っていた。こうした作品を読むとかつての叙法の、単純なものの静かな力の昇華は時として及ばないのではないかという錯覚を起こすに至る。

柴崎昭雄氏は32歳、清水かおりさんと共に

期待される新進作家の一員であると思う。少々上手すぎるくらいがあり、真実性に濃い色彩が付けられているので、作者の存在感が薄らぐ思いもしたが、さびしうておかしい題材を選ぶ作家だと思ふ。背後には常に冬があつて、自分の感受性を傾け尽くして一生懸命であることが判る作品群であった。

松田悦子さんは多くの柳誌に句を発表する熱心な投稿家であり、器用な人という印象があったが、本稿を視ると決して句が荒れていないし、生々しい生命感が漂っていた。何かがその身辺に迫ってきている大きな宿命的なものに、魂の喘ぎを私は感じた報告する。

板東弘子さんの応募作品は今年のが最も良かった。はつきり自分の川柳の歩く道に灯を掲げて、一匹の昆虫が光に向かうようにその型に向かうのを知る。本来の生命を素直に生かして、清水かおりさんの作品とは対象的に明快で、単純で、異質なものに振り向かぬ清

浄感をもった小品集であった。それも時代の推移に乗った、たくらみに侵されていないことに賛意を覚えた。

次に佳品二十句を紹介して置きます。

やがて夕暮れ通るものみんな通った 三八朗
 青銅の唇にわかに動きだす 茂生
 うしろから眩しいものが追って来る 明良
 尽きぬロマンよ鳥になる魚になる 和香
 透き通る月と寝ている微罪かな みちこ
 鈴が鳴る方へ群がる影ばかり 英雄
 こぼれ萩 女のとがきが続く 洋子
 水たまり生年月日ひよいと越す 千絵
 求め合うものはあったか花芒 草春
 氷点下つらつらと母になる 雪洲
 別れとはこれしきの事草紅葉 文香
 くちばしは遙かな空を銜えたる 三千子
 すり減ってゆく一枚の抽象画 幸子
 ボケットに掬い溜めたい遠花火 阿衣
 何を急いでいちめんの桜の中に あや子
 カタログのベッドにいつの間にか眠る ちえみ
 芥子の花四人姉妹の語尾弾む はん香
 黍の髭こゆく伸ばして天声人語 朱夏
 思いきり泣けばいいのに唐芥子 紀子
 魂を時に忘れぬ朴の花

選 後 感

八 坂 俊 生

応募作品を何度も読み返して思ったこと

は、自己の思いを述べることに一生懸命な作品が多いということである。川柳は思いの表現だといけれど、自己の思いを表現する前にちょっと立ち止まって、その思いを見つめることが必要だと思う。そうすることによって思いの流れに歯止めがかかり、自分が見えてくる。自分の本音が見えてくる。それを詠むのが川柳というものだろう。川柳は人間発見の詩だから、思いの流れに流されてはいけないのだ、と私は思う。

〈特選〉梅崎 流青作品

流青作品には、男がいる。

子はすでにわが子にあらず柿熟れる

豆ごはん故郷を持たぬ人と食う

人の死へ若葉てらてら光り合う

鶴を折るこの生臭きゆびを見よ

黙禱の頭上カミナリ雲生まれ

と詠むことができる男がいる。男は背筋を

ちゃんと伸ばし、常に前向きである。

〈秀逸①〉白藤 海作

かぼすすだちわたくしもまた青きもの

片耳に微量の毒のごこピアス

三十句のうち「わたくし」という語が使わ

れている句が九句。かように白藤海作作品は

「私川柳」だが、それが「わたくし」だけの

ことに終わらないものを持っている。

〈秀逸②〉島田 小吉

句にはっきりと島田小吉という人物が現れ

るようになった。句の対象を自分に引き付け

て詠むようになったからだろう。

晩学の夢捨て切れぬ独語癖

去年より落ちた酒量の祝い酒

自己暗示かけて一服風邪薬

〈秀逸③〉坂東乃理子

トラックに乗って自動車うれしそう

エビフライみたいに見える人魚の絵

などには、この作者独特の発見がある。澄

んだ目でとらえた驚きがある。子供のよう

な、というかもしれないが、そんなものでないことは次のような句が証明している。

定位置で糞虫死んでいるのかも

狐もまじる私の叔母の群れ

佳作に選んだ東川和子作品は、義父の死を詠んだ連作である。義父の突然の死から七七日忌までの、日常と思いが客観的にとらえられ、三十句全体としてはすぐれているが、一句一句が独立したものになっていないのが惜しまれる。

以下、印象に残った句を。

鼻歌に殺意が混じる月の夜

靴下の穴に気付いたのは他人

未来から来た赤ちゃんという家族

遅延は《都すこんぶ》鼻の奥

海の見える丘に黙って連れてゆく

恥多き日を下駄箱にしまい込む

恒 雄

和 子

恵 子

政 二

朱 夏

細長い部屋

樋 口 由 紀 子

「生が終わって死が始まるのではない。生が終われば死もまた終わってしまうのだ」とは青森出身の寺山修司氏の言葉。

昨年の四月、私の父は死んだ。

今回、Z賞の三十句を自選するとき、父の死後一氣に書き上げた十二句の中からの十句を入れた。父が生きていればこれらの川柳は書けなかった。父の死によって父の句が生まれたことは確かだ。しかし、私はこの事実を報告しようとしたのではない。父の死によって私の中で何かが揺さぶられ、見えないものが見えた。それを川柳として昇華させたかった。

第十回に準賞をいただき、その後も上位にいつも入賞させていただいていたが、私には何か足らなかった。父の死というつらい出来事が私の川柳を後押ししてくれた。

父の句を含めた作品でZ賞をいただけたことが、なにより嬉しかった。ありがとうございました。

川柳の風土性

梅 崎 流 青

川柳の風土性が失われつつある。それが良いか悪いかは別にして、北には北の、南には南の川柳があつていい。

風土性どころか個としての川柳さえ希薄。

頭で作る川柳の氾濫は言葉も「おぼろ」。いきおい作者の全体像さえおぼろにしてしまう。

おぼろは作者にとって非常に都合がよい。鑑賞者が作品以上の鑑賞をしてくれる場合があるからだ。

マスコミを中心とする文明の発達や生活の中流度がそうさせるのであろうか。まさに手足を汚さずとも川柳はできるといえる。

その反動として「内面描写」の川柳となるのだろう。

川柳は「人間、社会を詠う」との教条を振りかざすつもりはないが、「社会」が余りにも少ない。

川柳で「人間、社会を告発する」ということを改めて大切にしたいと思う。

川柳Z大賞受賞者

- | | | |
|-------|---------------------|-------------|
| ①第1回 | 昭和58年「1982（昭和57）年度」 | 細川 不凍（北海道） |
| ②第2回 | 昭和59年「1983（昭和58）年度」 | 酒谷 愛郷（伊万里市） |
| ③第3回 | 昭和60年「1984（昭和59）年度」 | 古谷 恭一（高知市） |
| ④第4回 | 昭和61年「1985（昭和60）年度」 | 西 山茶花（岡山市） |
| ⑤第5回 | 昭和62年「1986（昭和61）年度」 | 海地 大破（高知市） |
| ⑥第6回 | 昭和63年「1987（昭和62）年度」 | 桑野 晶子（札幌市） |
| ⑦第7回 | 平成元年「1988（昭和63）年度」 | 金山 英子（神戸市） |
| ⑧第8回 | 平成2年「1989（平成元）年度」 | 長町 一吠（岡山市） |
| ⑨第9回 | 平成3年「1990（平成2）年度」 | 西条 真紀（岡山市） |
| ⑩第10回 | 平成4年「1991（平成3）年度」 | 加藤 久子（岩沼市） |
| ⑪第11回 | 平成5年「1992（平成4）年度」 | 石部 明（岡山県） |
| ⑫第12回 | 平成6年「1993（平成5）年度」 | 吉田 浪（岡山市） |
| ⑬第12回 | 2作家 | 荻原久美子（東京都） |
| ⑭第13回 | 平成7年「1994（平成6）年度」 | 渡辺 和尾（愛知県） |
| ⑮第14回 | 平成8年「1995（平成7）年度」 | 金山 英子（神戸市） |
| ⑯第15回 | 平成9年「1996（平成8）年度」 | 樋口由紀子（姫路市） |

風炎賞受賞者

- | | | |
|------|-------------------|---------------|
| ①第1回 | 平成5年「1992（平成4）年度」 | 荻原久美子（東京都） |
| ②第2回 | 平成6年「1993（平成5）年度」 | 佐藤 岳俊（岩手県） |
| ③第3回 | 平成7年「1994（平成6）年度」 | なかはられいこ（名古屋市） |
| ④第4回 | 平成8年「1995（平成7）年度」 | 柴崎 昭雄（青森県） |
| ⑤第5回 | 平成9年「1996（平成8）年度」 | 梅崎 流青（柳川市） |

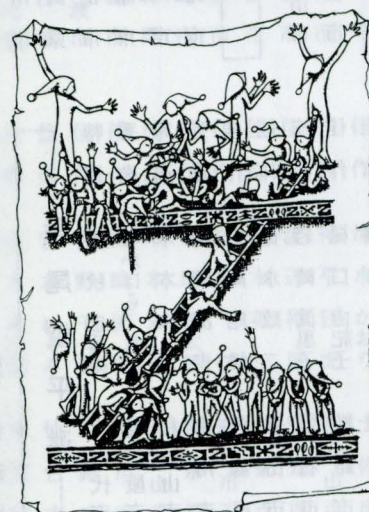
佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選
渡辺	岩崎	情野	神谷	みとせ	柿木	大谷	福井	梅崎	西秋	樋口	柴崎	島東
和尾	眞里子	千三郎	三八郎	りつ子	英一	晋一郎	文明	流青	忠兵衛	由紀子	昭雄	道弘子
愛知	黒石	姫路	名古屋	高松	大東	高松	青森	柳川	八千代	姫路	青森	香川
県市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市

酒谷愛郷選

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
広瀬	樋口	渡辺	鷺谷	東川	岩佐	西秋	峯
ちえみ	由紀子	和尾	美津子	和子	栄三	忠兵衛	裕見子
仙台	姫路	愛知	秋田	伊勢	西宮	八千代	大津
市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市

佳作 佳作
木本 本多
朱洋 夏子
和松 松原
歌山 山市

川柳Z賞



Z賞オリジナル・テレカ

第16回川柳 Z 賞作品応募要領

【応募作品】創作30句を12組（10名の選者・事務局・校正用）

1997（平成9）年発表作品か未発表作品（原則）

【締 切】1998年1月31日消印まで（☆応募者名簿は発表しません）

【選考委員】

細 川 不 凍（北海道）	佐 藤 岳 俊（岩 手）
尾 藤 三 柳（東 京）	吉 田 健 治（東 京）
片 柳 哲 郎（横 浜）	岡 田 俊 介（大 阪）
橘 高 薫 風（大 阪）	寺 尾 俊 平（岡 山）
八 坂 俊 生（香 川）	酒 谷 愛 郷（伊万里）

【応募用紙】B4専用紙。ワープロの方は専用紙に準じて下さい。用紙の必要な方は、返信用封筒を同封の上事務局まで。専用紙以外（や感熱紙）での応募はご容赦下さい。

【参 加 費】不要です。が、入選句集希望の方は¥1,500（送料発行所負担）を振替など（切手・券不可）でお送り下さい。

【速報・5月予定】

参加者で希望の方は、受取人の住所氏名入り返信用官製（に限りまず）ハガキを応募時に同封して下さい。

【 賞 】大 賞	津軽塗り記念楯（副賞15万円）	1 名
風炎賞	（奨励賞として）津軽塗り記念楯	1 名
優秀賞	テレカ	若干名

【送付と問い合わせ先】

030-1303 青森県蟹田町145

川柳 Z 賞事務局 FAX 共・0174-22-3537

【振替口座名】川柳 Z 賞 【口座番号】02350-5-2718

★Z賞テレカ（50度）を¥1,000（送料共）でお頒けしています。

★FAXまたはハガキで申込み下さい。

第十五回川柳 Z 賞入選作品集

発行日 一九九七年八月一日

編集人 南 野 通

発行人 高 田 寄生木

発行所 川柳 Z 賞選考委員会

〒030-1130 青森県蟹田町一四五

☎0174-221337（FAX共）

頒 価 一、五〇〇円（送料発行所）

振 替 川柳 Z 賞

〇二三五〇一五二七一八

印刷所 青森コロニー印刷

住 所 青森市大字幸畑字松元六二一三

T E L 〇一七七（三八）二〇二一

●事務局より

選者の方々の奉仕による、第15回入選作品集をお届けします◆選外佳作に、たった一点入るのも難しい賞ですが、次世代を指ししております。特に若い作家の多数の応募という形でのご支援を期待します◆表紙を岩崎眞里子さんに手直しして貰いテレカを、新しく作りました。50度数を買い上げ戴きます◆30句一組の作品を送って戴いておりますが、12枚共コピーの鮮明さを確認してからご応募下さい（杉野 草兵）